

533  
248



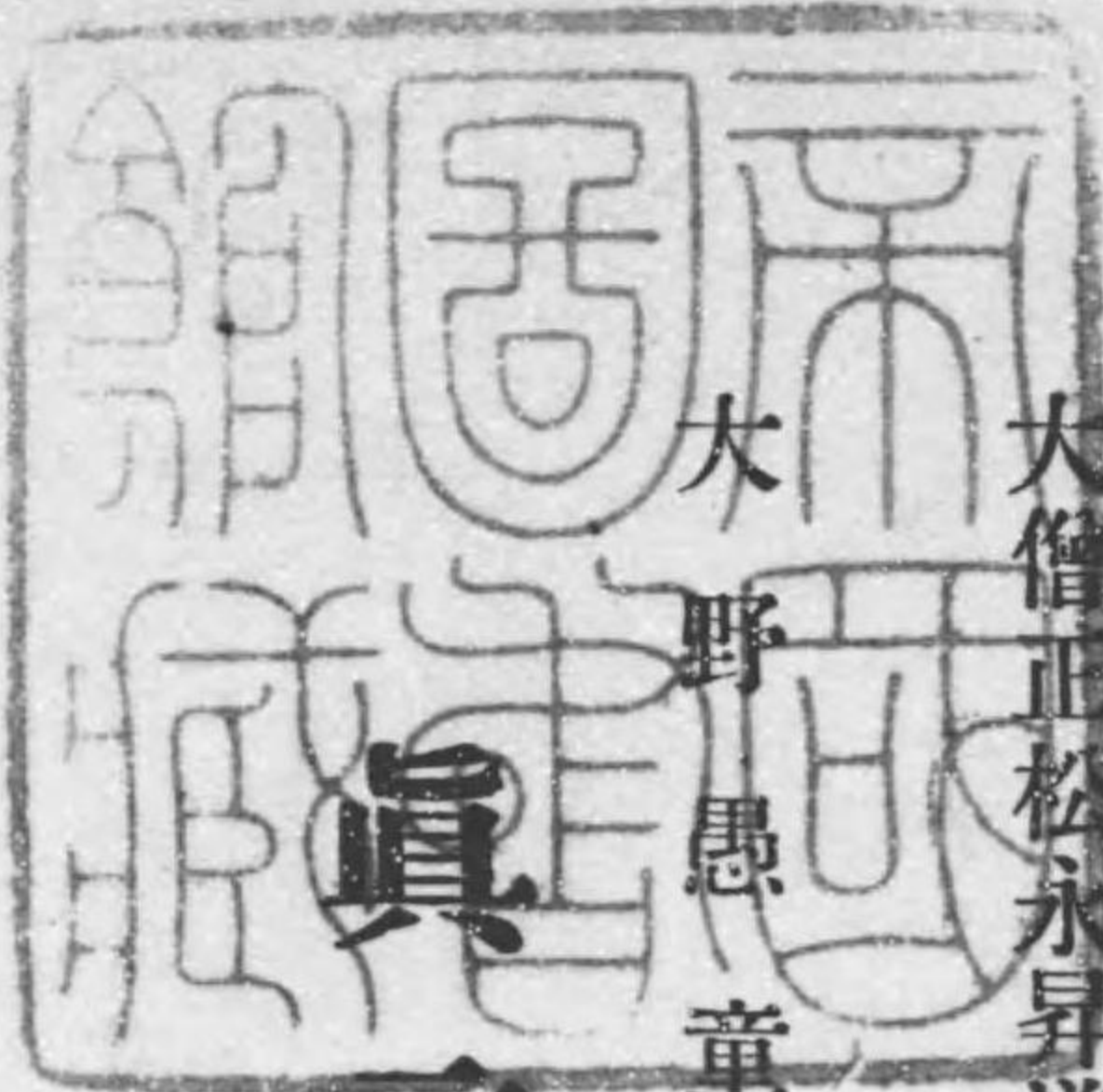
始



眞言宗東寺派管長教王護國寺法主

大僧正松永昇道猊下校閱并題辭

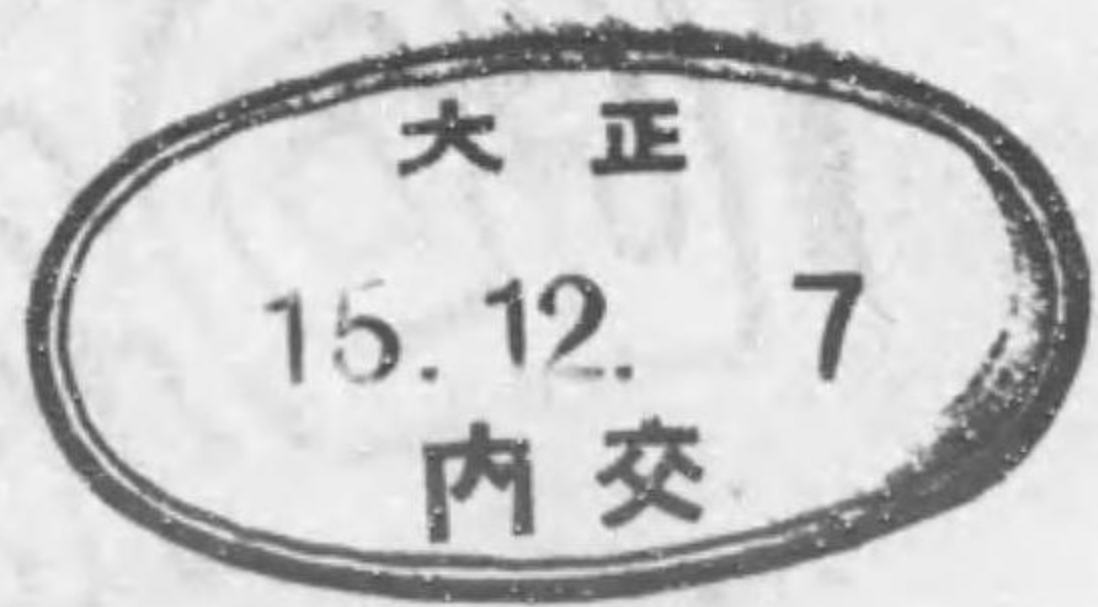
大野愚童著



眞言祕密之法

發行所

深  
艸  
園





一花五韻秘法

李法正



## 自序

真言密教の高大無邊の教理、教相、宇宙哲學の眞髓を、未熟の著者が此の小冊子に説き盡さんなどは、以ての外の潜越、決して斯かる非望を企てた譯ではありません、只、真言祕密の法とは、世俗に考へられて居る如く、而かく祕密主義のものではないと申すことを、密教門外の人々に知らしめんが爲めに、真言教理の一斑を、可成的専門語を避けて通俗に記述し、世間の人々が密教信仰の導火線たらしめんとすの希望に過ぎぬのであります。之れに

よつて、一人でも眞言信者を作ることが出来たならば、著者の満足は、これに過ぐるものはありませぬ。

大僧正猗下は著者のこの微衷を諒とし給ひ、悉くも拙著の御校閲並に、特に『開顯秘法』の題辭を賜つたことは、著者の光榮とする所であります。謹んで猗下に感謝致します。

大正十五年初秋

深艸園に於て

大野愚童識

## 眞言秘密之法 目次

第一章 眞言秘密の意義	一
◇三業三密	
第二章 教主大日如來	七
◇薄伽梵	
第三章 本宗正所依の經論	二一
◇三藏	
第四章 血脈の相承	二五
◇南天の觀塔	
第五章 密教の胎金兩界	二四
第六章 高祖弘法大師	二七
第七章 辯顯密二教論の大意	三六
第一 法身說法	四三
一 自性法身	

- 二 他受用法身
- 三 變化法身
- 四 等流法身

◇本地説と加持説

- 第二 果分絶離の境界を説く(果分可説論)……………四六
- 第三 佛位に優劣あること……………四九
- 第四 成佛の迅速なること……………五一
- 第五 教益深廣なること……………五三
- 第八章 十住心論の梗概……………五六
- 第一 異生羝羊心……………六〇
- 第二 愚童持齋心……………六一
- 第三 婴童無畏心……………六三
- ◇世間三個の住心と出世七個の住心
- 第四 唯蘊無我心……………六五
- 第五 拔業因種心……………六七

第六 他縁大乘心……………六九

◇阿頼耶識(一名藏識)

- 第七 覺心不生心……………七二
- 第八 一道無爲心……………七三
- 第九 極無自性心……………八〇

◇十玄六相

第十 祕密莊嚴心……………八六

◇瑜伽

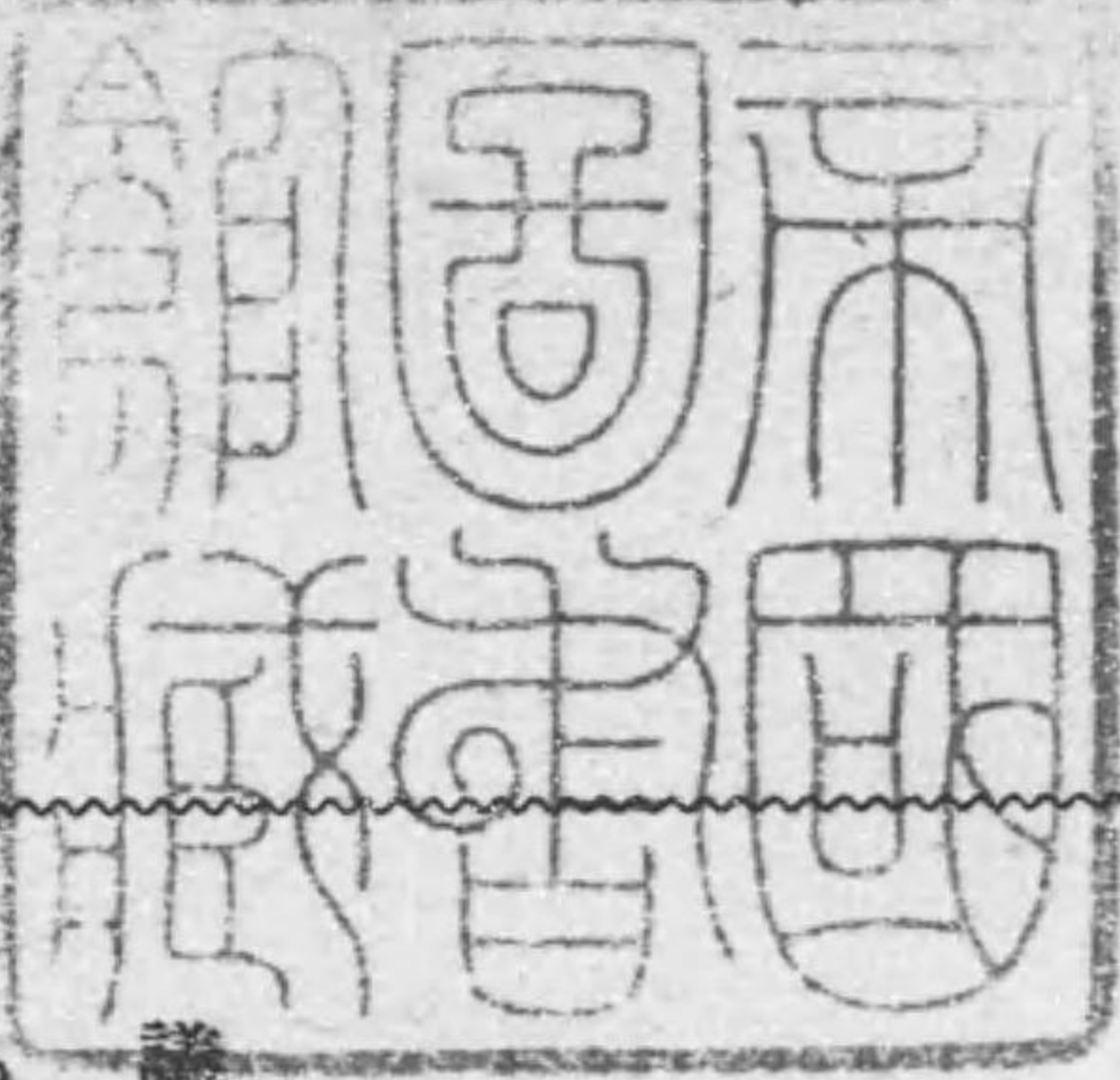
第九章 六大無礙論……………八九

第十章 四曼不離論……………九六

- 第一 大曼荼羅……………九九
- 第二 三摩耶曼荼羅……………九九
- 第三 法曼荼羅……………一〇〇
- 第四 羯磨曼荼羅……………一〇〇

◇羊石

第十一章 三業具足論……………一〇五



曼茶羅

# 眞言祕密之法

大野愚童著

## 第一章 眞言祕密の意義

眞言祕密と申しますと、世俗には一般に不可思議とか、神祕とか云ふやうな意味に考へられて居るやうであります。然し決してさう云ふ譯ではなくて、眞言とは曼茶羅と云ふ梵語の譯でありまして、梵語の曼茶羅とは三密圓滿具足(他に色々意

# 附録眞言密呪

◆加 持	
第十二章 三大圓融論	一〇七
第十三章 卽事而眞と阿字本不生	一〇九
◆而二不二	
第十四章 六大法身論	一一三
第十五章 本有常住論	一一五
第十六章 密教の人生觀	一二七
一 本宗信徒の信仰	一
二 眞言密呪	五
三 光明眞言	一七
四 他人の好意好感を得る法	三三
附記	

# 目次終

義はありますがと云ふ意でありますから眞言は  
圓滿にして具足せる宗旨と申す意味で、又此の譯  
語の眞言とは、眞實の語言と云ふことで、其の説く  
所に少しの虚言、偽りの無いと云ふことでありま  
す。

本宗の教主に在します大日如來は、眞語、如語、不  
妄、不異者、と申しまして、如來が宇宙人生の眞際を  
自覺し給ひ、其の自覺し給ひし境界を、偽らず、飾る  
ことなく、有様その儘にお説き遊ばされたのが即  
ち眞言——眞實の語言——で之れをば自内證の法門

と申すのであります。

又眞言宗は他宗と異りまして、言語、文字に對し  
て大いに重きを措くのであります、聲字實相義に  
『眞言者則是聲、聲則語密』とある如く、之れは全  
く如上の意味から來て居るのであります、他宗で  
は、『聲は無常なり』とか、『聲は指月の指の如し』  
とか、若しくは、『不立文字』など、申しまして甚  
しく之れを輕んじて居りますが、本宗に在りまし  
ては之れに反して、『聲字即實相』又は、『聲字皆  
常』と申しまして、言語と文字に頗る重きを措く



のであります。

尤も本宗の宗名を、真言宗と確然と一宗の宗名として呼ぶに至りましたのは、弘仁拾四年の頃、即ち高祖弘法大師御歸朝後拾八年の後の事でありまして、高祖が本宗の教相判釋として、辯顯密二教論と十住心論とをお作りになつて、始めて本宗獨立の旗幟を明かにせられてからのことであります。

次に秘密とは如何。抑々宗教と云ふものは最も通俗的に、且つ布教的のものでなくてはならぬ

秘密とは如何

密咒、口  
傳、口  
師資面授

ものであります。然るに真言宗は何故に獨り秘密にするのであるかと難じる人があります。成程、之れは一應尤も至極な理窟で有りますが、本宗は何も勉めて秘密にする譯ではありませんが、何と申しましても真言密教の教理は、世界孰れの宗教に比して、雄大且つ深遠でありますのと、今一つは、本宗獨特の密咒は固より、其他の要義は口説、口傳に依り、師資面授と申しまして、直接に師から弟子に直傳する掟と成つて居るのでありますから、本宗行者も自然世間的に公開することを憚る傾とな

るのでありますが、然し、秘密と云ふ語の本來の意  
味は、強がち隠すと云ふ意味ではなくて、深遠と云  
ふことを意味するのであります、必ずしも秘密に  
するのではありませぬが、何分教理が餘りに高大  
深遠でありますから、衆生には容易に之れを窺ひ  
知ることが困難なので、夫れで秘密に附せられて  
居るかの如くに考へらるゝのであります。之れ  
を譬ふれば、日輪は限なく照らして居ましても、盲  
者の爲めには秘密であると同様に、如來の三密即  
ち身、口、意の三秘密は決して隠さるゝのではあり

ませぬが、凡夫には容易に理解が出来兼ねるから  
であります。

●三業三密。

三業とは身、口、意の三種の業用でありまして、之れ  
は人を標準として名づけたものであります。宇宙萬有には凡て此の三  
業が具つて居るのであります。即ち身業とは形體上の作用、口業とは音  
響上の作用、又意業とは精神的現象を指すものであります。假令へば風  
が吹くのも水が流れるのも、乃至花が咲くと云ふことも、風、水及び花  
に夫々の意思があつて、咲きもし、流れもすると言つては、此  
の道理は六大體性色心不二論から見ましても、唯心論からしましても、  
否定すべからざる眞理で、非情、無機と爲されて居る草木にも礦物にも  
此の三業は悉く具備して居るのであります。如來の三業は凡夫には容易  
に了解し難いから之れを三密と申すのであります。

眞言密教の教主は大日如來で有ります、之れに就きましては、弘法大師の付法傳に左の意味のことが記されてあります。

『薄伽梵遍照如來、五智所成の四種法身を以て、本有金剛界自在大三摩耶、自覺本初、大菩提心、普賢滿月、不壞金剛光明心殿中に於て、自性所成の眷屬、金剛手等十六如來、及び四攝行天女使、金剛内外八供養、金剛天女使、小佛刹微塵數乃至不可說微細法身、祕密心地の十地を超過せる身語心金剛と與に、自受法樂の故に、各、自證所聖地境界

の三摩地法を説く』。云々

薄伽梵遍照如來とは大日如來の御事であります。又大日經には、

『薄伽梵如來加持廣大金剛法界宮に住し、一切の金剛者皆悉く集會せり』。云々

◎薄伽梵

は梵語でありまして、之れには六義がありますが、今は能破の義に依る、能破とは、内魔、外魔を破り盡すことで、其れを人體に表はして、薄伽梵と云ふのであります。内魔とは心に貪、瞋、痴の煩惱を起すこと、外魔は色、聲、香、味、觸の外部の刺戟であります。若し吾々が此れ等の内外魔を破し盡すならば、直に薄伽梵毘盧遮那の徳を證得することが出来るのであります。毘盧遮那は太陽の梵語であります。

と有りまして、即ち教主大日如來が、金剛薩埵等の

諸聖者に對し、不壞金剛光明心殿と、法界宮とに於て眞言教をお説きになつた事實を申すのでありまして、之れを金剛界、胎藏界の二門とし、略して金胎兩部の法門と申しまして、之れこそ我が密教の眞髓、眞言の主眼であります。

斯の如く眞言は大日如來の常恒説法でありまして、如來は今も尙我々衆生に對して説法しつゝ在らせられるのでありますが、凡夫は種々の疑惑、雜多の妄執に覆はれ妨げられて、此の尊い説法が耳に入らぬのであります。之れを譬ふれば、美妙

の音樂が有りまして、聾者は之れありとは知らず、色彩の陸離たりと云ふも盲目が之れを信せざると同様に、自己の缺點を省ることなくして、尊き如來の御教を感受することの出來ないのは、此等の聾者盲目と均しく、誠に憫むべき極みであります。然れど凡夫も一大勇猛心を發し、一大信念を奮起して、專念如來を信仰致しますと、漸く如來の御説法が耳に入り、其の教益が目に見えるやうに至るのであります。

本宗所依の聖典は經、律、論の三種に亘り、其數々百卷の多數に達しますが、就中正所依とすべきものは、眞言宗の新義派、古義派の兩派を通じて、左の七種であります。

經。佛、菩薩、羅漢、天人及び仙人の所說梵語「スートラ」

大日經七卷 善無畏譯

金剛頂經三卷 不空譯

瑜祇經一卷 金剛智譯

念誦經一卷 同上

律。佛の定め給ひし佛徒の戒律梵語「グアイヤナ」

蘇悉地經三卷 善無畏譯

論。菩薩、羅漢の說かれたる經典の註解

發菩提心論一卷 不空譯

釋摩訶衍論十卷 筏提摩多譯

●右の經律論を三藏と申します。

以上を五經二論と申しまして本宗の金科玉條であります。尙深く密教の教理を研究せんとする人々は、大師の御作に成れる左の諸書を繙讀されたいと思ひます。

一行記十卷。

兩部の大  
三部祕經  
五部祕經

十住心論十卷。

祕藏寶鑰三卷。

卽身成佛義一卷。

聲字實相義一卷。

卍字義一卷。

般若心經祕鍵一卷。

辯顯密二教論二卷。

前記大日經と金剛經を兩部の大經と云ひ、之に蘇名地經を加へて三部の祕經と云ひ、此の三部に瑜祇經と念誦經とを加へて五部の祕經と云ひ、又菩

十卷章

提心論、祕藏寶鑰、二經論、卽身義、聲字義、卍字義、心經、祕鍵の七部十冊を十卷章と稱へまして、皆本宗の寶典であります。

#### 第四章 血脈の相承

眞言密教は師資相承を尊び、口説傳法を重んずることは、前に述べました如くであります。其の經論、儀軌、修法等に就きて、金剛界、胎藏界の兩部に別れて居りますが、教理の上から此の兩部を別々に見ると、不二即ち同一と見ると、その見界の異なるに依りまして、血脈相承にも差異があります。其

の兩部一傳説に依りますると、始祖は大日如來でありまして、如來は一切佛菩薩の能生にましく、て、凡夫言志の域を超越し、其體は法界に遍く到らざる所なく、智は一切智々、壽は三世を超え、其の業用の一部分が、太陽の作用が萬象の上に及ぼす影響に類似して居る所から、大日如來と申すのであります。斯くて此の始祖大日如來の教勅を直接に受け継がれたのが、同聞衆の首座なる金剛薩埵でありまして、薩埵は其の承繼し給ひし所の教勅を集めて、之れを南天竺の鐵塔の中に納め、能く此

の兩部の法門を持誦するに足るべき資格ある行者の出て来る時機を待つて居られたのであります。此れが本宗の第二祖であります。其後釋尊入滅後七八百の星霜を経て、南天竺の或る富豪の家に生れ、博學多識、加之、又種々の咒術に長じた偉人が出現されました。白芥子七粒の加持に依つて、此の南天の鐵塔を易々と開き、親しく金剛薩埵に拜謁して、遂に祕密灌頂を受け、大日如來祕密相承最尊無上の真言陀羅尼宗を人間界に傳へられたのが、即ち龍猛菩薩と稱へて第三祖であります。





瑜伽の奥儀を窮め、開元二十九年、師の歿せらるゝ時、其の遺命を奉じて、大本の大日經及び、金剛頂經を求むる爲め、其の故國師子國(セイロン島)にお歸りに成りました所、國王は非常に之れを歡待し、常に宮中に止めて供養し、朝夕親ら其の安否を問ひ給ふ程でありました、夫れより龍智菩薩を訪ひ、十八會の金剛頂瑜伽十萬頌の經、大毗盧遮那大悲台藏十萬頌の經、其他、五百餘部の經典を受け、尙も五天竺を周游して猶多くの密藏を求め、三年の後復た唐にお歸りに成りましたが、時の帝玄宗皇帝も

特進試鴻臚

第六祖不空三藏

一行阿闍梨

亦大に之れを歡迎し優遇し給ひ、宮中に於て親しく灌頂をお受けに成り、法弟の禮を執られました。降つて代宗の御代には、特進試鴻臚郷の官を授け、號を大廣智不空三藏と賜はりました。如何に代々御信仰が厚かつたかを知るに足りません、之れが第六祖であります。前に述べました金剛智三藏の門下なる善無畏の法弟に、一行阿闍梨と申す方があります、此のお方は十歳にして凡人を超え、書を讀むに再びせられなかつたと申す程の穎才でありました、初め出家して普寂律師の門に入り、天

大日經疏  
藥師如來  
消災除難  
念誦儀範  
第七祖慧  
果阿闍梨

台山に於て算法の秘訣を學び、名聲一時に高く、開元四年玄宗皇帝の切なる勅請に依り、宮中にお入りになり成りましたが、帝が阿闍梨をお尊ひになる事は又頗る厚く、事大小となく、政令に至るまで、事毎に阿闍梨に諮ひ議り給ひ、然る後天下に令せられたと申す程でありましたが、此の阿闍梨は早く歿せられましたので、法弟の無かつたことは、寔に惜むべきことであります。其の著作には大日救疏の外に藥師如來消災除難念誦儀範等十種あります。斯くて不空三藏は之れを第七祖慧果阿闍梨

第八祖弘  
法大師

根本八祖

傳持八祖

に傳へ、延暦年中我が弘法大師は入唐して、慧果阿闍梨に就き密法の蘊奥を授かり、而して第八の祖とお成りになつたので有りますが、爾來資々相承けて今日に及んで居るのであります。以上を根本八祖とも又付法八祖とも稱へるのであります。が、此の外に傳持の八祖と稱するのがあります。此の傳持の八祖は、法を繼ぐべき弟子の有無に拘らず、密教を治く天下に布教し、之れを住持せしめた祖師と云ふ意でありまして、之れには大日如來と金剛薩埵とを除き、前述の善無畏三藏と、一行阿闍

梨とを加へるのであります。

(根本八祖—付法八祖)

大日如來—金剛薩埵—龍猛菩薩—龍

智菩薩—金剛智三藏—不空三藏—慧

果阿闍梨—弘法大師。

(傳持八祖)

龍猛—龍智—金剛智—善無畏—

行—不空—慧果—空海。

第五章 密教の胎金兩界

本宗に在りましては、諸佛、諸菩薩、諸神の尊像を

胎藏界曼  
荼羅  
金剛界曼  
荼羅

描き、之れを二幅として、一を胎藏界曼荼羅と稱へ、  
他を金剛界曼荼羅と申します。胎藏とは攝持含藏  
の意でありまして、金剛とは堅固、不壞と云ふこと  
を意味するのであります。尙ほ之れを表示致しま  
すれば、

胎藏界—五大…物…理…因。

金剛界—識大…心…智…果

金剛界とは比喻に依りて、佛智の一端を知らせた  
ものでありまして、胎藏界とは佛の理を胎兒が母  
の胎内に宿るに喩へて、其の義趣の一斑を知らせ

たものであります。又右の表に示す如く、胎藏界は物でありまして、本有平等の理を表はし、金剛界は心でありまして、修生差別の智を示したものであります。斯く兩界は一應の分別は有りますが、後章に述べまする六大無礙佛凡互具の意からしましても、本覺始覺の關係から見ましても、胎藏界の中にも金剛界が有り、又金剛界を擧げると胎藏界は亦其中に在るのでありまして、二にして而かも不二でありますから、之れを胎金不二の曼荼羅と申すのであります。形骸の方面から見て胎と

ひ云、作用の方面から見て金と云ふのでありまして、本有の圓滿なことを胎曼と云ひ、修生の用大を金曼と云ふので、胎の上の金、金の中の胎で、理の中に種々の意を含むことを形容して、胎曼の諸尊と云ひ、智の作用の多いことを喩へて金曼の諸尊と申すのであります。

#### 第六章 高祖弘法大師

大師の御事蹟につきましては、誰も洽く知る所でありますから、極めて大略に止めて置きますが、大師は素と名門の子孫でありますが、讃岐國多度

の邊鄙にお生れに成りました。幼時から頗る穎悟凡人で在らせられず、十五歳の御時上京して大學に入門し、其の課程をお學びになる傍ら好んで佛典を修め、二十歳の御時勤操大德の門に入つて遂に出家し給ひ、十年間苦學獨修し、最後に大日經を得られました。此の御經は甚しく難解で獨修に不便で有りましたから、桓武天皇の延暦二十三年、三十一歳の御時、遂に意を決して朝廷に請ふて入唐し、時の大德慧果阿闍梨の門に入りて密教の全部を傳受し、大同元年新經、梵字眞言讀を初め其

他多くの經文、佛具等を携へて御歸朝に成りました。時は今より凡そ一千百餘年前の事であり、大師の入唐に就きましては、稍詳細に述べることゝ致しませう。時は桓武天皇の御宇延暦二十三年七月六日と云ふに、遣唐大使藤原葛野麻呂の一行は、勅を奉して肥前國松浦郡田浦に解纜して唐土へ渡ることゝなりました。大師は同じ留學生の橘逸勢と共に葛野麻呂の第一船にお乗込に成り、天台の傳教大師は判官菅原清公の第二船に乗込みました。偕て只今では支那へ行くこと云へば隣

へ行く位に考へて居る人々には、當時の支那航海の危険と困難は到底も想像することは出来ない事でありませう。先づ船と云へば其頃は勿論皆帆船でありますから、風を利用すべき筈であります。此の時代には未だ風の利用と云ふことが、一向研究されて居ませんでしたから、反つて反對に風に逆つて航行して居たのであります。其理由如何と申しますると、恒信風は陰曆三四月から八月頃までは西南から吹き、八九月から翌年の二三月頃迄は東北から吹くのであります。夫れである

に拘らず、遣唐使の發程は何時も夏期でありますから、丁度反對の方向に行くことゝ成ります。其上羅針盤とても無く、只日月星辰を唯一の便りとして、淼々たる大海原に乗出すのでありますから、實際命掛けの仕業であります。實に信仰の爲め、若くは勅命に依るでなければ、決して出來得べき業ではありませぬ。斯くて大師の一行も當時の慣例に依り、七月六日の拂曉に四隻の帆船を鐵鎖もて繋ぎ合せ、扱て田浦を出發したのであります。果せる哉間もなく大逆風に襲はれて、四隻の船は悉

く離散し、中にも大師の御船は、最も困難極る航海をなされたのであります。事の委しくは大師御著の性靈集に記されてあります。斯く海上に漂へること實に三十有四日、八月十日に於て辛じて支那福州の赤岸鎮、只今の福建省赤岸溪附近に着岸されましたが、當時日本からの船は大抵楊子江の附近に着いたものであります。然るに斯る方角違いに吹き流されたのでありますから、長安へ入京の許可手續を爲すために、多大の日子を費し、漂着當時より實に八十六日後の十一月三日に至

り、漸く入京の許可が参りましたが、此の福州から長安までは、支那里程で約五千三百里の長途であります。急ぎに急がれて、之れを僅々四十八九日で踏破されたのであります。陸路の困難も亦海路に劣らず、一しほであつたらしく察せられます。長安にお着に成りました大師は、其の一行の人々と共に、支那政府から指定された公館に宿泊して居られました。翌年二月に至り遣唐大使は任務を果して歸朝の途に着きましたので、大師も共に公館をお引上げに成り、西明寺と云ふ寺院にお移

りに成りましたが、此の間二月から六月まで、多方の大徳を歴訪して請益し給ひ、六月遂に青龍寺の慧果阿闍梨に晋謁して密教の奥儀を授かり、僅か二ヶ月の後即ち其の八月には早くも傳法阿闍梨位の灌頂を授けられましたのであります、之れに依つて見るも如何に大師の御才徳が非凡に在しましたか、又慧果阿闍梨の大師に對する御信任が如何に深大であつたか、想像し得らるゝのであります。然るに同じ年十二月に慧果阿闍梨は、老病の爲め遂に入寂せられましたので、大師は恩師

の葬送を了り、約一ヶ月の後御歸朝の途にお就きに成りました。大師は尙久しく滯唐して研鑽を續けたき御志望でありましたが、恩師の御遺訓を重んじ、一日も早く密教を故國に傳播せん爲めに、斯くは勿々御歸朝をお急ぎに成つたこと、推測されます。かくて遣唐判官高階真人の一行と共に、翌大同元年十月無事に歸朝されたのであります。

其翌大同二年大和國久米寺に於て、本邦最初の大日經の大講演をお開きに成りました、是れを實



に大師が眞言宗樹立の濫觴であります。後、嵯峨天皇の御信任を受けられ、又左しも剛恢なる傳教大師さへ、大師の鴻徳には對峙し難く、遂に屈して其法弟と成つて、大師に師事されたのであります。次で大師は辯顯密二教論、十住心論、及び其の要義を抜摘せる祕藏寶鑰を著して眞言宗の立脚地を固め、又即身成佛義、吽字義、聲字義等を著して密教の教理を明かにし、創めて高野山を開きて根本道場を奠め、又各地を巡歴しては到る處に法雨を注ぎ、平城、嵯峨の諸帝に灌頂を授け奉り、或は密呪に

依りて雨を降らし、泉を湧かしめ、諸病を加持し、路を開き、橋を架し、池を掘りて國利民福を弘め給ひしなど、其の功德の高大なることは、到底筆舌の及ぶ所ではありませぬ。

併し大師の尊い所以は決して如上の御事績而已に在るのではありません、其の信仰すべき點は、濟度的絶大の御努力と、其の圓滿具足せる御人格とに在るのであります、此の大師の人格の前には、恐らく釋迦牟尼佛も遜色なしとは申されまじ、況んや其他の基督や、法然や、親鸞や、多少人格上

一宗を開き一宗の開祖と成らるゝ大徳は、皆必ず其の宗旨の憲法たる教相判釋を作らるゝのであります——略して教判と云ひ、顛倒して判教と云ふ——(本宗には文字を顛倒して用ふる慣例があります)勿論此の名目は後に名づけたものであります(が)要するに判教は一宗成立の最大要素であります(が)大師の辯顯密二教論は即ち本宗判教中の一でありまして、密教と顯教との優劣、淺深を種々の經論を引證してお説きに成つたもので、如何に我が密教が顯教に優れて居るかを證明された

の缺陷を免れない輩は、大師に對して忸怩たらざるなきを得んやであります、而も大師は一見平々凡々裡に斯かる大業を成就せられたのであります、吾人が大師を信仰する所以は全くこゝに在るのであります、眞言密教はかるが故に亦圓滿深遠であるのであります。

次章には大師判教の骨子たる辯顯密二教論の大意と、次に十住心論の概要、六大無礙等以下章を追ふて、密教々理の一斑を説くことゝ致します。

### 第七章 辯顯密二教論の大意

ものでありまして。第一法身說法。第二果分絶離の境界を説くこと。第三佛法に優劣あること。第四成佛の迅速なること。第五に教益深廣なること。の五ヶ條から成立つて居まして、要するに其基く所は教主の異なるに依るのでありまして、顯教は報身佛、應身佛二身の説であります。此の報應二身は隨他意の爲めに、法身佛から現れたものであるから、従つて其の報、應二佛の教法も一種の假方便である、然るに密教は反之して、法身の直說であつて、些の假說、方便を交へない眞實の教法で

あるから、其の幽致に至つては、顯の等、妙二覺も到底及ぶ所でない、又顯教では法身を、無色、無形、無說法としますが、密教に在りては教主が既に法身でありますから、隨つて其の法身は、有色、有形、有說法であります。又顯教では華嚴の十地論等に於て、因分可説、果分不可説と致しますが、密教では顯教で不可説の點即ち果分を説くのであります、此れぞ密教が大に顯教に優れて居る點であります。佛位の優劣と申すことは、顯の禪宗に云ふ所の是心是佛と、密の即身成佛とを比較して見まするに、

事理具足  
知行合一

三劫成佛  
念即身一

禪にありては只精神的に自覺さへすれば實行は之れに伴はなくとも此れを佛とするのでありますが密の即身成佛は事理具足知行合一で自覺すると同時に徳行が之れに伴はなければ決して之れを成佛とは申さぬのであります。次に成佛の遲速につきても顯教では三劫成佛を説きますが、密教にあつては父母所生の身に於て一念乃至一生に成佛するのであります。即ち顯は三劫成佛で頗る長時間を要するも密は即身に於て一念若くは一生に成佛するのでありますから成佛迅速

横の判教

四種法身

であります。終りに教益深廣とは主として呪法に關することでありまして密教には他宗には決して之れ無き密呪と云ふものがあります。之れを持誦する時は諸の罪障を消滅し諸の教益を蒙ることが出来るのであります。以上を横の判教と呼ぶのであります。尙項を改めて第一法身説法以下第五教益深廣に就いて述べませう。

第一 法身説法

眞言宗には四種の法身と申すことがあります。金剛頂分別聖位經に次の如く記されてあります。

一、自性法身。 自とは自然の義、性とは不改の名、法は軌持の義、身は體、依、聚の三意を含む。此の自性法身は、自性法界宮に在りて、自性相應の機に對して說法す。

二、他受用法身。(顯教の報身に類す)

此れは十地菩薩等の爲めに法身を現じて說法す、之れは他に受用せらるゝ最初であるから、他受用と名づくる。

三、變化法身。(顯教の應身佛に類す)

此れは地前——地前とは、菩薩修行位の初地に

入らんとする位地に達すること——の菩薩、二乗の凡夫の爲めに、三十二相の佛身を現じて說法する。

四、等流法身。

此れは其の威儀言音を、六道九界の群生に、等同隨類して遍く度する。

右の自性法身は、所謂法身佛でありまして、次の受用、變化、及び等流の三法身は、法身佛が、自性の境界にばかり住して居るのでは、衆生が利益を受ることが出来ませぬから、夫々三種の法貌を現じ、隨他

法界宮に出現し、加持世界に出で、説法、利生し給ふことでありまして、顯教では、法身佛は無説と説くに反し、密教に在りては、法身有説を論じて、本宗の優れたる點を、お示しに成つたのであります。

●本地説と加持説 本地説とは、大日經の教主を本地身又は自性身即ち自性法身とするの説と、自性法身の位は、所化の機根を絶して居るから、加持身に降つて説くこの説との、分別であります、併し加持説とて、顯教の報佛説法とは異なります。要するに、法身を兩様に見たのであります。本地説は本宗古義派の説で、加持説は新義派の説であります

第二 果分絶離の境界を説く

(果分可説論)

此の果分と申しますのは、佛の境界を指すので

ありまして、之れを哲學的に申しますると、實在の事であります。佛の境界や、實在界の事は、到底言説の及ぶ所でない、よし解説するとしても、夫れは假説である、到底眞實の寫せるものではない、即ち不可思議、不可稱、廢詮、談旨、百非、洞道、四句、皆亡、果分不可説、と云ふのが一般に顯教の所説であります、然るに大師は、二教論の開卷第一に、釋摩訶衍論をお引きに成つて、五重の問答をお立てになり、此の果分——實在——の境界が、言説を離絶して居ると云ふ考は、無明の分位である、未了の見であると云つ

て、之れを排斥し給ひ、更に五教章、十地論を引證して宣はく。因分可説は顯教の爲す所であるが、顯教の出来ない所の、果分不可説と云ふ境界を可説するのが、即ち密教の本領である。とお説きになりました、要するに果分可説は積極的宇宙觀でありまして、佛陀も實在も本來活動的であり、積極的である、故に大師は筆を極めて、顯教は遮情門——消極的——であるが、我が密教は表徳門——積極的——であると、力説されたのであります、尙之れに關しては、六大無礙論、即事而眞論、及び當相即道論等は、此

の深義を解説せられたものでありますから、此等の諸經は、本宗信者の須く研究すべき寶典であります。

第三 佛位に優劣あること

自宗の佛と他宗の佛とを比較して、優劣ありと云ふことは、各宗共に説く所でありますが、眞言宗の所論は、自ら他宗の夫れと異つて居ります點は、前にも略述した如くであります、尙又、顯教たる天台宗にも、即身成佛を説きますが、其説に依りますると、即ち吾々は佛と成り得べき資格を具へて

居るから、其資質から云へば、此の身は其儘佛で有ると云ふ説でありまして、所謂理論的成佛であります。故に本宗の、『父母所生の肉身に大覺の位を證す』と申しまするのとは、霄壤の差異があるのであります。大師は教王經の開題に、『三世一切の如來皆此の門よりして成佛す、餘教に成佛と説くは、併に是れ方便引攝の言のみ、是れ究竟の實談にあらず、顯の至極たる華嚴、天台も猶空寂の理に滯りて、後位に祕密の金城あることを知らず』とお説きに成つて居ります。

第四 成佛の迅速なること

眞言宗が即身成佛して、他宗と成佛の遲速を判つ原理は、是れ亦、遮情と表徳の相異であります。概して顯教は物質を迷妄的に考察し、肉體を無上に罪惡視する結果、難行、苦行して此の迷妄、煩惱の罪惡を切斷して、然る後に成佛せんと努力する傾向があるから、甚だ長い時間を要する譯で、六度萬行、三劫成佛と云ふのも、必竟之れが爲めであります。然るに本宗は六大の事法を本とし、物心不二を主張し、眞妄の無礙を論じ、此の肉身此の現生を、決し



て而かく迷妄的のものとは解釋しないのであります、時間を常住不生の本體論の上から融通し、空間を本來具徳の上から無礙せしめて、顯の如く、現世吾人の心身を消極的に絶滅せしめ、然るに後に新たなる眞正のものを作り出さんとするのではなく、此の煩惱の心、此の不自在の身を、涵養陶冶して積極的に發育せしめ、此れに佛の活動作用を發現せしむるのでありますから、其所に絶滅改造と、培養發育との分別があるのであります、従つて顯教では切芽改種を繰返して居る間に、密教に在り

ては三方の肥料と三密の耕耘とで、培養その宜しきを得て、此の心身が直ちに成佛するまでに、發育さるゝのであります、これが身に即して佛と成るので、此れをしも成佛迅速と申すのであります。

第五 教益深廣なること

眞言宗は大小聖淨を統一し、清濁併せ呑むの雅量を以て大成したものでありますから、理性的で而かも感情的の所もあり、現世主義で有るが、又未來主義をも包含して居ります、又三密門を開放してありますから、何人も自由に入ることを得ます、

禪定主義者も入るべく、念佛者流も入ることを得べく、あらゆる機根に應じて居りますから、老若男女、乃至、愚人も悪人も、各、入るべき門戸が開いて居ます、盲者は陀羅尼に依り、聾啞者は曼荼羅に依つて各、覺することが出来るのであります、其の入門は異つても、既に入りたる以上は皆一堂に會し、遂に三密具足して金剛身を逮得することが出来るのであります。

密教には又密咒と稱する靈妙不可思議力があります、大師の秘藏記に曰く、『咒とは佛法未だ漢

地に來らざる前きに、世間に在る咒禁の法、能く神驗を發して災患を除く、今此の陀羅尼を持する人能く神通を發し災患を除くこと咒禁の法と相似せり、是を以ての故に咒と云ふ』と性靈集には、『若し信修あれば男女を論せず皆是れその人也』と又興教大師の密嚴遺教錄には、『讒かに名字を聞けば永く思趣を離れ、一たび耳目に觸るれば忽ちに生死を超ゆ』とありまして、此の密呪を持誦するときは諸の罪障を消滅し、現當二世の教益を蒙ると説かれてあります、尙密呪に就きましては

附録に詳述致します。

第八章 十住心論の梗概

十住心論、詳しく申しますると秘密曼茶羅十住心論は全部十卷より成り、大師畢生の大傑作でありまして、佛教一切の經論は、悉く此の十卷の中に網羅されて居ります、否、啻に佛教ばかりではありません、印度各種の宗教、哲學から、支那の儒教、道教から、日本の神道も歐米の哲學、宗教をも包含して餘す所はありません。密教に志あるの士は、是非一讀して大師の圓滿なる御性格と、上乘の御資質

に接しなければなりません。

偕て十住心論は、其の序文に記されたる如く。

『勅を奉じて秘趣を述ぶ』とあります如く其の御著作の動機は、全く勅詔に基くのでありますが、其の遠因は大師が多年研鑽蘊蓄せられたる大識見と、宗教的信念の轉進醇化の大精華が煥發して、此の一大論章と成つたものでありまして、其の脱稿は天長七年四月でありますから、大師の御齡五十七の御時で、御入滅の四年前でありまして、その御思想の最も圓熟せられた時代でありますから、此

の大傑作の出で來た事は、當然の結果であります。  
抑、十住心とは、凡ての宗教、道德及び學問を、其の  
深淺の程度に應じて、十種に大別して説かれたも  
ので、一には異生羗羊心、二には愚童持齋心、三には  
嬰童無畏心、四には唯蘊無我心、五には拔業因種心、  
六には他縁大乘心、七には覺心不生心、八には一道  
無爲心、九には極無自性心、及び十に祕密莊嚴心、で  
ありますが、是れを前に述べたる、辯顯密二教論を  
横の判教と稱するに對して、豎の判教と申すので  
あります。此の一から九までを顯教に當て、十を

密教に當てるのでありますが、密教は全十に通ず  
る法相でありますから、眞言の表徳から云ひます  
れば、顯教も亦密教の一部分でありますから、之れ  
を九顯十密の十住心と申すのであります。  
此の外更に二の祕密に約する十住心と云ふこ  
とがあります、其の一は、五種の三味道に約する十  
住心と申しまして、十住心は五種の三昧を顯はす  
ものとする説と、其二は、十住心は大日如來の萬徳  
を顯はせるものとする説であります、之れに就  
て委しい事は、寶鑰快鈔と云ふ書に、詳しく記して

ありますから、御一讀を願ひます。

左に十住心の大略を述ることゝ致します。

第一 異生羴羊心

凡夫狂醉、不知我非、但念姪食、如彼羴羊。

是れは凡夫が狂醉して善惡を辨へず、愚癡にして因果の理を信せず、常に六道に輪廻して種々の身相を現はすが故に、異生と申すのであります。此の住心の人はその有様たる、假令へば羊が食慾、姪慾の外には何等の希望も無きと均しく、社會、人類の爲めに何等貢獻する所なきは勿論、常に酒色に

耽溺するばかりで、自己、家族及び社會に對する義務すら知らないもの、即ち無宗教、不道德、人間の最下等なるものであります。今日の所謂紳士と號するものゝ階級に最も多き住心に譬へられたのであります。

第二 愚童持齋心

由外因緣、忽思節食、施心萌動、如穀遇緣。

愚童とは凡夫のことでありまして、言ふ心は、凡夫にも稍、人間らしい良心が萌起し、人道を守るやうになることでありまして、假令へば三冬霜雪の

爲めに全く凋落せる植物が、回り来る春の陽氣に遭ひて芽を發する如く、先づ己が食慾を節して、之れを飢餓に困しむ者に施して布施の快感を覺り、漸次に節欲知足の域に進み、賢者を見ては之れと齊しからんことを思ひ、因果の道理を信じ、罪禍を辨まへ、君に忠、親に孝にして、道德、宗教を信じ、十善の業道を修行して、ひたすら善に移らんとするの心であります。即ち前の第一住心よりも一步進みたる人で、大師は之れを佛教の五戒、十善を守る人、並に儒教を奉ずる人の心にお當てに成つて居

ります。

第三 嬰童無畏心

外道生<sup>ジ</sup>天<sup>ニ</sup>、暫<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>蘇息<sup>ヲ</sup>、如<sup>シ</sup>彼<sup>ノ</sup>嬰兒<sup>、</sup>犢子<sup>ノ</sup>隨<sup>フ</sup>母<sup>ニ</sup>。

大師の釋に曰く。「嬰童無畏心とは外道人を厭ひ、凡夫天を欣ぶの心なり、上は非想に生じ、下は仙宮に住し、身量四萬由旬、壽命八萬劫にして、下界を厭ふこと瘡癩の如く、人間を見ること蟬蛾の如く、光明日月を蔽ひ、福報輪王に超えたりと云ふと雖も、彼の大聖に比すれば劣弱愚蒙なること孩兒に似たり、小分の危縛を脱るゝが故に無畏なり、未だ

涅槃を得ず故に嬰童なり』と、實にや此の人生は汚濁罪惡の叢淵で、如何に徳を修め善を行ふも、有らゆる不義不善は絶へず周圍から襲撃して参ります、そこで、斯かる汚濁の人間世界を超越したる、安樂世界に往生したいとの思想が起るのであります、之れが無畏即ち蘇息で、嬰兒が母に随ふの意であります、此の安樂自在の天上に生じ度いとの希望から、種々の善根、功徳を積み、雜多の難行、苦行を重ねるのであります。前の第二及び此の第三の住心を人天乗と申しまして、道德倫理の教に相當

し、基督教の生天論も此の住心に相應するのであります。

以上第一から第三までを世間三個の住心と云ひ第四以下第十までを、出世七個の住心と申します。

第四 唯蘊無我心

唯解法有、我人皆遮、羊車三藏、悉攝此句。

凡そ此の世の中の萬事は轉變無常であります、常住のものとは一つもありません、最も大切に思ふ我が身體すら、老、病、死は到底免るゝことは

出来ませぬ、人生は實にうたかたの泡沫に均しいものであります、然るに此の無常を常住と考へ、爰に我執を起すことは迷妄の甚しきことであります、此の迷見、此の我執から種々の罪業を作り、其の結果として人生乃至萬有に罪障の連鎖を來たすのでありますから、吾生は只この罪業連鎖の一節であるから、一の我として執すべきものは無い譯であります、そこで我執を斷ち、無我に歸すれば無常の人生を脱却して、常寂無苦の涅槃界、即ち變動なき實在界に歸入することが出来ると云ふので

ありまして、此れが佛教の入門であります。大師の釋に。『空三昧に神我の幻陽を知り、無生の盡智に煩惱の後有を斷ず、五蘊の泡露を厭て、三途の塗炭を惡み等持の清涼を欣つて大虛に廓同し、湛然として無爲なり、身智の灰滅を尙ぶも、法を存するが故に唯蘊なり、人を遮するが故に無我なり、簡持を義とするが故に唯なり』とありまして、佛教小乗教の聲聞界に當る住心であります。

修身十二、無明拔種、業生已除、無言得果。



大師の釋に曰く。『拔業因種心とは麟角の所證、部行の所行なり、因緣を十二に觀じ、生死を四五に厭ふ、彼の花葉を見て四相の無常を覺り、此の林落到に住して三昧を無言に證す、業惱の株杭此に依て抜き、無明の種子之に因て斷す、爪犢遙かに望んで近づかず、建聲何んぞ窺窺することを得ん、湛寂の潭に游泳し、無爲の宮に優遊す、自然の支羅授かることなくして具し、無師の智慧我よりして獲る』。

此の住心は小乗の緣覺乘の人に當るのであり

ます、前者と大差は有りませぬが、只一步進んで居る點は、飛花落葉、榮枯盛衰の世間相を觀じて、人生の真相を自覺するのであります、そこで此の惡濁の社會と分離して、自分一己は惑業を慎み、所謂、慎獨の君子と云ふべき人でありまして、前者と共に自證のみでありまして、化他が有りませんから、最上の思想では有りませんが、又人生の眞意義を得る入門であります。

第六 他緣大乘心

無緣起<sup>シテ</sup>悲<sup>ヲ</sup>、大悲初發<sup>ス</sup>、幻影觀<sup>シ</sup>心<sup>ニ</sup>、唯識遮<sup>ス</sup>境<sup>ヲ</sup>。

此の住心は唯識法相宗の意に當ります、前の第四、第五の住心なる小乗の心は、自調自度で自己の事ばかり度るのでありますが、此の住心まで進みたる人は、阿頼耶識と稱する比較的常住のものを發見し、自利のみでなく、自他二利の業を爲しますから、他縁大乘心と名づけられたのであります、勿論、大乘教は皆二利であります、今此の宗旨が大乘の初めであることを知らしめる爲めに、特に大乘心と名づけられたのであります、此の宗旨は小乗と異り、人法二空を立て、三界を以て唯心の

縁起となし、眞如に對しては何等の作用無き一の理體と致します、そこで此の宗旨は、眞如と萬法との間に事理の隔歴を置くのであります。哲學的に申せば、主觀的と云ふべき唯心論でありまして、人間精神の本源を窮めて、其の本源に歸せんとするのであります。

◎阿頼耶識(一名藏識) 法相大乘では、小乗教の業感縁起を主張する眼、耳、鼻、舌、身の六識の上に、第七末那、第八阿頼耶識と云ふものを見出し、之れを常在のものとし、之れに一切の種子、即ち萬象を發見すべき無限の能力のあるものとし、吾人が日々作動する業果は、凡て此の阿頼耶識に印象し、第二の吾人を生出する起因となること云ふのであります、要するに阿頼耶識は、吾々個人の本體である、即ち眞如が實在にか云ふものと異り、吾々が各自に一個づつ所持して居るものであつて、

個體的唯  
心論

覺心不生

三論宗  
南宗

先づ人の靈である、故に此の靈以外のものは、自己の身體も、他人も、家屋も、地球も此の靈の所變であるを説くので、個體的唯心論であります。

第七 覺心不生心

八不絶戲、一念觀空、心源空寂、無想安樂。

此の住心は三論宗の所説に相當するのであります。三論宗は一に南宗とも申しまして、龍樹菩薩の作なる、中論、百論、十二門論の三論を所依と致しますから三論宗と云ふのであります。此の宗旨は破邪と云ふことを主とする宗旨で、宇宙の本體、實在の何たるかに就て、種々の異論あるを、悉く

妄見、戲論であるとして之れを排斥し、實在の如何なるものであるかは、到底、言語文字の企て及ぶ所ではない、即ち認識限界を超絶して居るものであつて、一切の妄見、戲論を離れた直覺が即ち實在の本性である、と云ふに在るのであります。然し之れは單に實在を消極的に象徴せんとするのみであつて、未だ積極的に實在の性徳を發揮することが出来ませぬから、之れは大乗佛教の極致ではなくて、大乘の始教であります。始教の中でも法相宗は現象界のみを主として説明しますが、本宗は

此の説を否定して、直に實在を論じますから、性宗とも云ふのでありますが、されど此れは前に述べました如く、消極論でありますから、實大乘の入門としてあるのであります。乍去此の無所得の空觀から、漸く密教の阿字門に入るべきものとなるのであります。

大師の釋に曰く、『夫れ大虛は寥廓として萬象を越し氣に含み、巨壑は泓澄として千品を爰の一水に孕む、誠に知りぬ、一は百千の母と爲り、空は即ち假有の根なり、假有は有にあらざれども、而かも

有々として森羅たり、絶空は空にあらざれども、而かも空々として不住なり、色は空に異ならざれば、諸法を建て而かも宛然として空なり、空は色に異ならざれば、諸相を泯して而かも宛然として有なり、是の故に色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり、諸法も亦爾り、何物が然らざらんや、水波の分離に似たり、金莊の不異に同じ、不一不二の號立ち、二諦四中の稱顯はる、空性を無得に觀じ、戲論を八不に超ゆ、時に四魔戰はざるに面縛し、三毒殺さるに自ら降る、生死即ち涅槃なれば更に階級なし、

煩惱即ち菩提なれば斷證を勞することなし、然りと雖も無階の階級なれば五十二位を壞せず、階級の無階なれば一念の成覺を礙へず、一念の念に三大を経て、而かも自行を勤む、一道の乘に三駕を馳せて、而かも化他を勞す、唯蘊の無性に迷へるを悲み、他縁の境智を阻てたるを歎く、心王自在にして本性の水を得、心數の客塵は動濁の波を息む、權實の二智は圓覺を一如に證し、眞俗の兩諦は教理を絶中に得、心性の不異を悟り、境智の不異を知る。』と。

一道無爲心

第八 一道無爲心

又、如實一道心。又、如實知自心。又、空性無境心。

一如本淨、境智俱融、知此心性、號曰遮那。

此の住心は境智の無礙、即ち物心の不二、事理の一如を説くもので、法華經の説に相當しますから、天台、日蓮、宗及び禪宗の所攝であります、淨土宗も其の教理は此の住心に屬するのであります、一道とは眞如一道、又は法華一道の意であります。

大師の釋に曰く、『若し夫れ孔宣震旦に出で、五常を九州に述べ、百會釋迦華胥に誕れて、一乘を三艸に開く、是に於て狂醉の黎元は住つて而して

天、日、禪の所攝

百會

進まず、癡闇の黔首は往て而して歸らず、七十の達者は頗る其堂に昇り、萬千の羅漢は乃ち金口を信ず、度内の五常は方圓合はず、界外の一車は大小入らず、此故に三七に樹を觀し、四十に機を待つ、初めに四諦方等を轉じて人法の垢穢を洗ひ、後には一兩の圓音を灑いで草木の芽葉を霑す、蓮華三昧に入て性徳の不染を觀じ、白毫の一光を放つて、修成の遍照を表するが如きに至つては、會三歸一して、佛智の深多を讚し、指本遮末して成覺の久遠を談ず、寶塔騰踊して、二佛同座し、娑界震裂して四唱一

處なり、髻珠を賜ひ、瓔珞を献ず、利智の鷲子は吾佛の魔に變せるかと疑ひ、等觀の彌勒は子の年の父に過ぎたることを怪む、一實の理本懷を此時に吐き、無二の道満足を今日に得、爾れば羊鹿斃れて而して露牛疾し、龍女出で、而して象王迎ふ、二種の行處は身心の室宅に宿り、十個の如是は止觀の宮殿に安ず、寂光の如來は境智を融して而して心性を知見し、應化の諸尊は行願を顧みて而して分身相に隨ふ、寂にして而して能く照し、照にして而して常に寂なり、澄水の能く鑒るに似、瑩金の影像の

心極無自性

心華嚴の住

如し、濕金即ち照影、々々即ち金水なり、即ち知んぬ、境即般若、々々即境なり、故に無境界と云ふ、即ち此れ實の如く自心を知るを名づけて菩提と爲す云々』と。

第九 極無自性心

水無自性、遇風即波、法界非極、蒙警忽進。

此の住心は華嚴の教を奉ずる人の心に當るのであります、第八住心の教で事理兩界の説明は盡きたる如くであります、未だ十分に諸法の縁起無礙を説きません、然るに此の住心では盛んに無

礙を談じて、眞如と諸法、諸法と諸法との縁起無礙を説きます、所謂十・五・六相の法門であります、斯の如く一切諸法は、各其の自性を守ることなく、悉く無礙融即しますから、極めて自性無き心と云ふのであります。

大師の釋に曰く、『夫れ甚深なるものは麼嶺、峻高なる者は芥石なり、然りと雖も芥石も竭き磧らぎ、虚空も量りつべし、蘇迷は十六萬、麼嶺は八億、那なり、近くして而して見難きは我が心なり、細にして而して空に遍するは我が佛なり、我が佛は思議

し難く、我が心は廣にして亦大なり、巧藝心迷ふて  
笑を擲ち、離律眼盲して見を休む、禹の名舌斷へ、夸  
が歩み足削る、聲縁の識も識らず、薩埵の智も知ら  
ず、奇哉の奇、絶中の絶なるは其れ只自心の佛か、自  
心に迷ふが故に、六道の波鼓動し、心原を悟るが故  
に、一大の水澄静なり、澄静の水には影萬像を落し、  
一心の佛は諸法を鑒知す、衆生此の理に迷ふて輪  
廻絶ゆること能はず、蒼生ただ狂醉して自心を覺  
ること能はず、大覺の慈父、其の歸路を指し給ふ、歸  
路は五百由旬なり、此の心は則ち都亭なり、都亭は

常舎に非ず、隨縁に隨ふて忽ちに遷移す、遷移定め  
る處なし、是の故に自性なし、諸法自性なきが故に  
卑を去り尊を取る、故に眞如受薰の極唱、勝義無性  
の祕告あり、一道を彈指に驚かし、無爲を未極に覺  
とす、等空の心、是に依て始めて起り、寂滅の果、心還  
て因と爲る、是の因、是の心、前の顯教に望むれば極  
果なり、後の祕心に於ては初心なり、初發心の時に  
便ち正覺を成すと宜しく其れ然るべきなり、初心  
の佛、其徳不思議なり、萬徳始めて顯れ、一心稍現す、  
此の心を證する時、三種の世間は即ち我身なりと



知り、十箇の量等は亦我が心なりと覺る、廬舍那佛  
始め成道の時、第二七日に普賢等の諸大菩薩等と  
廣く此の義を談じ給へり、之れ即ち所謂華嚴經な  
り、爾れば乃ち華藏を苞んで以て家と爲し、法界を  
籠めて而して國と爲す、七處に座を莊り八會に經  
を聞く、此の海印定に入つて、法性の圓融を觀じ彼  
の山王の機を照して心佛の不異を示す、九世を刹  
那に攝して、一念を多劫に舒ぶ、一多相入し、理事相  
通す、帝網を其の重々に譬へ、錠光を其の隱々に喻  
ふ、遂に覺母に就て以て發心し、普賢に歸いて而し

十玄六相

て證果す、三生に練行し、百城に友を訪ふ、一行に一  
切を行し、一斷に一切を斷す、初心に覺を成し、十信  
に道圓なりと云ふと雖も、因果異ならず、五位を經  
て而かも車を馳せ、相性殊ならず、十身を渾けて而  
して同歸す、斯れ即ち華嚴三昧の大意なり。』

◎十玄六相 萬有にはすべて六相があるのであります、六相とは總、  
別、同、異、成、壞であります、斯く六相が一物の上にも又多物集合の  
上にも存するのであります、此の六相のあることから推して行きますと、  
萬有は十玄の妙理に由りて緣起することが知られるのであります、十玄  
緣起、六相圓融は事々無礙の理を成し、結局一心法界、心佛衆生三無差  
別、即ち物心二元の一如的實在さ、現象即實在、個心即普遍心、その義  
に到達するのであります。

十玄とは

- 一、同時具足相應門。
- 二、一多相容不同門。
- 三、諸法相即自在門。
- 四、因陀羅網境界門。
- 五、微細相容安立門。
- 六、秘密隱顯俱成門。
- 七、廣狹自在無礙門。
- 八、十世隔法異成門。
- 九、主伴圓明具德門。
- 十、託事顯法生解門。

此の十門は總でありまして、他は別であります、故に一を開けば餘の九となり、九を合するに一に歸結します、要するに萬有は個々別立して居るが、其間互に脈絡が關聯して緣起存在して居るのであります。

第十 秘密莊嚴心

顯藥拂塵、眞言開庫、祕寶忽陳、萬德卽證。

此の第十の住心こそ卽ち密教に相當するのでありますから、此の冊子に述べる全體が此の説明に外ならぬのであります、先づ前の續き柄から略述致します。

大師の釋に曰く、『卽ち是れ究竟して、自心の源底を覺知し、實の如く自身の數量を證悟するもの云々』と。

如實に自身の實相を覺知し、無盡莊嚴の曼荼羅を開顯するので、祕密莊嚴心と云ふのであります、以上の第八、第九の住心で、實相及び緣起に關する

事は説明し竭したるやうでありますが、尙之れを密教から見ますと、華嚴、天台の兩一乘は、何れも其の立脚地を理界に置いての説でありますから、差別界を重視する眞言から見ると、尙説明の餘地があるのであります、密教は其の立脚點を事界に置き、六大を以て萬法の根元とし、又之れを實相とするのであります、即ち眞言は六大を以て萬法を解釋するのであります。

然らば六大とは何ぞや、次章に些しく之れを述べませう。

第九章 六大無礙論

眞言宗の哲學的見地は物心二元一如説でありまして、萬有の實體を六種に大別して、之れを六大と稱するのであります、所が本宗の此の六大説を見て、直に本宗を物質主義なりと速斷するものがあります、之れは甚だ淺慮の觀察でありまして、本宗は決して物質主義ではありません。

抑、六大の起原は、本宗の玉條たる高祖の作に成れる、八祖相承の頌文から出たのであります。

其の頌文とは、

六大無礙常瑜伽、 四種曼荼各不離、  
 三密加持速疾題、 重々帝網名即身、  
 法然具足薩般若、 心數心王過刹塵、  
 各具五智無際智、 圓鏡力故實覺智。  
 と云ふのであります。

六大とは、

地大。水大。火大。風大。空大。識大。

でありまして、大日經に左の金句があるのであります。

我覺本不生、出過語言道、諸過得解脫、

遠離於因緣、知空等虛空。

之れを梵語の母音たる種子眞言及び右の大日經の句に配すると左の如くであります。

地 𑖀 阿 本不生。

水 𑖆 囉 出過語言道。

火 𑖇 囉 諸過得解脫。

風 𑖇 𑖇 遠離於因緣。

空 𑖇 欠 等虛空。

識 𑖇 𑖇 我覺。

萬有の體性は右の六大に歸着し、此の六大には夫

々の性徳、作用を具備して居るのでありますが、此の句を以て六大に配當せられたのは、無論弘法大師であります。

六大の中地、水、火、風の四大は之れを色法と稱へて物質であります、第六の識大と云ふのは心でありますして、空大は是等四大の物質の各相互間と、又各物質と識大——心——とを無礙(無礙とは相通じて支障なきの意)せしむるものでありますから、前に述べし如く、本宗の教旨は物心二元一如に歸着するのであります。

萬有の體用を六方面から觀察すると云ふことは、頗る當を得た方法であります、今之れを表示しますれば。

作用	性徳	形相	顯色	字義	種子眞言 即ち母音	六大 多具
持	堅	方	黄	本不生	𑖀	地大
攝	濕	圓	白	離言說	𑖂	水大
熟	煥	三角	赤	無塵垢	𑖄	火大
養	動	半月	黑	離因緣	𑖆	風大
不障	無礙	團形	青	等虛空	𑖈	空大
決斷	了知	圓或は種々の形	白 <small>又種々の色</small>	我覺	𑖊	識大

異類無礙

萬有は此の六音、六義、六色、六形、六性、六用に洩るゝものはありません。即ち六大は萬有を網羅して居るのであります、而して此の六大は箇々孤立するものでなく、常に無礙渉入するものであります、此の無礙に同類無礙と異類無礙とがあります、異類無礙とは、物心の二元が相頼つて萬有が成立して居ると云ふ意味であります、即ち識大と地大と、水大と識大と、乃至火大と地大と互に異つたる各大が渉入無礙して、人類も動物も草木も金石も成立して居るのであります、夫れ故に或る一大の中

物心一如

には常に他の五大が備はつて居る譯であつて、夫れ故に普通には非情と呼ばれて居る金石にも意識が有るので、之れを哲學的に考察しますると物心の一如に歸するので、六大無礙を心的方面から論ずれば萬有皆な心で、物的方面から察すれば、萬象皆な物であります、併し心を無視して物の性用を知ることがは難く、物を心外に去つて心の作用を現すことは出来ません、そこで色心不二、物心一如と云ふことに歸するのであります。次に同類無礙と申しまするのは、甲の地大と乙の地大と、若く

色心不二

同類無礙

六大の互具

は甲の識大と乙の識大と互に無礙涉入すること  
であります、又は佛の六大と凡夫の六大と無礙し、  
犬の識大と人の識大と涉入し、若くは自己の識大  
と他人の識大と無礙涉入する如き作用を云ふの  
であります、六大は斯く同類異類共に互に無礙涉  
入しますから、假令へば一地大の中には他の五大  
が具有されてあることは前述の如くであります  
が、之れを六大の互具と云ふのであります、乍併互  
具の上に於ても、地大は地大として、識大は識大と  
して、各、其の特色たる異なる相を有して居ることは

六大の各具

法爾の六  
大と隨緣  
の六大

勿論であります、此の有様を稱して六大の各具と  
云ふのであります。  
又六大に法爾の六大、隨緣の六大と申すことがあ  
ります、法爾とは本性のことで、隨緣とは形色、相用  
を指すのであります、即ち前表中の堅、濕、煥、動等は  
法爾で、方、圓、黃、白、赤又は持、攝、拓は隨緣と云ふので  
あります、然るに六大は元來活動的でありますか  
ら、然爾の六大が活動しますると忽ち隨緣的とな  
るのであります、でありますから、隨緣の六大を外  
にして、法爾の六大は求め得られぬのであります、

六大の本性は活動的でありますから、活動の六大の外に静止の六大は求めることは出来ませぬ、これを六大無礙常瑜伽と云ふのであります

◎瑜伽とは相應するの意

以上は萬有の本性を論じたのでありますから、次章には現象に就て略述することゝ致します。

第十章 四曼不離論

前章に掲げました八句の頌文中、第一句の六大無礙常瑜伽を體とし、四種曼茶各不離を相と致すのであります、偕て四曼即ち四種の曼茶羅とは、一

切の現象を四種に分類したものでありまして、一には大曼茶羅、二には三摩耶曼茶羅、三には法曼茶羅、四には羯磨曼茶羅であります、猶詳細に述べますと。

第一、大曼茶羅。

此れは色相に名づけたものであります、譬へば人體に就いて申しますれば、身體の色相に就ては、全體が五大であるから、大曼茶羅と云ふのであります。

第二、三摩耶曼茶羅。



形象

名稱

作用

羊石

三摩耶は梵語でありまして、此れには平等、本誓、除障、警覺の四義があります、此れは物の形象に名づけたものであります。

第三、法曼荼羅。

此れは物の名稱に就いて命じたものであります。

第四、羯磨曼荼羅。

羯磨も梵語で、威儀、事業等の義を有するもので、物の作用に名づけたものであります。

◎羊石。

本宗には文字を顛倒することは前に述べましたが、又往々

略字を用ひます、羊石は一例で羯磨の略であります。徂徠が本邦の石を集めた書の中に佛家の羊石未だ審かならずは滑稽です。

右は一物の上に有する四曼即ち色相、形象、名稱、作用を示したものでありまして、萬有は一として此の四曼を具備して居ないものはないのであります。

扱て宇宙の現象界一切を四曼に配當致しまする。

大曼荼羅——動物界。

三摩耶曼荼羅——國土草木。

現象界

法曼茶羅——學術、宗教。

羯磨曼茶羅——動作、事業。

又之れを密教の宗教的意義に配當致しますれば。

大曼茶羅。

佛菩薩の相好身又は其の形象を彩畫に描きたるもの。

三摩耶曼茶羅。

佛菩薩の所持の刀劍蓮華等を指す之れには本誓の義を有しますから佛菩薩の印契刀劍等は其の佛菩薩の本誓の心を外部に表現したるもの

であります。

法曼茶羅。

陀羅尼——真言——佛菩薩の名號一切の經文等は法曼茶羅であります。

羯磨曼茶羅。

佛菩薩の濟度的活動其他一切の事業を指すのであります。

以上の四曼が各不離であると云ふことは前章に述べました六大無礙の異類及び同類無礙乃至互具各具の理と異なることではないのであります。要

するに四曼と云ふのは、見聞觸知の境界たる相大  
の中で、相貌を大曼荼羅と名づけ、其上に何かの意  
義を見出して、之れを三摩耶曼荼羅と名づけ、之れ  
を文字に顯はす場合を法曼荼羅と名づけ、又此れ  
の種々の動作、若くは威儀を羯磨曼荼羅と名づけ  
るのでありまして、差別界の凡てを淨化して、四曼  
の就れにか屬する徳相とするのであります。  
大師の即身成佛義に。

『是の如き四種の曼荼羅、其數無量、一々の量、虚空  
に同じ、彼は此を離れず、此は彼を離れざること、

猶空光の無碍逆らはざるが如し』

とありまして、爰に一曼を挙げますると、他の三曼  
は自ら其中に攝在し具足して居るのであります、  
所謂、異類無礙であります、又甲の四曼と乙の四曼  
とも不離であります、佛の四曼と吾々の四曼とも  
不離であります、即ち之れ同類無礙であります。

### 第十一章 三業具足論

吾々凡夫の身、口、意の働きを三業と云ひ、佛の三  
業は凡夫には容易に知り難い所から三密と名づ  
くる云々は、卷首の解義の所に述べましたが、此の

三業は畜に人間にばかりではなく、禽獸、蟲魚、草木、金石に至るまで悉く此の三業を具足して居るのであります。此の三業も亦前述の六大無礙、四曼不離と同一定理に依つて、同類若くは異類とも加持するのであります。即ち口業の中には身、意の二業を具して三業の異類加持があります。又佛の三密と凡夫の三業と、若くは自己の三業と他人の三業と互に加持涉入して、所謂入我我入の理に依り、爰に感應道交の實現を見るのであります。以上述べ來つた六大無礙、四曼不離、及び三業具足とに依

つて、實在界と現象界の説明は盡きて居るのであります。此の三者の關係を論ずるのが次の三大圓融論であります。

◎加持 加さは如來の大悲が吾々の心水に影を宿し、持さは衆生がその大悲の影を受持すること。

第十二章 三大圓融論

密教で萬法を説くには三大を以てするのであります。三大とは物の體、相、及び用であります。體は地、水、火、風、識の六大から成り、相は大、三、法、羯の四曼で、用は身、口、意の三業であります。體とは實在で、相

と用とは現象であります、三大圓融と云ふのは、此の體、相、用が如何に關係して居るかを考察することでありまして、以上述べし如く六大も各、無礙涉入し、四曼も互に離るゝことなく、三業も互に感應加持して心佛を顯すのであります、頌に曰く。

六大無礙常瑜伽。四種曼荼各不離三密加持速疾顯。

元來實在と現象は別物でないことは前にも述べました如くであります、實在の活動する有様が現象でありますから、實在の外に現象なく、現象を

離れて實在は無いので、之れと同様に、相、用の二大を措いて體大を得ることは出来ませぬ、又相大の中には體と用との二大は自ら具はつて居るのであります、用大の中には體、相二大が具足して居ます、故に三大は固より不離であります、現象即實在、即事而真であります。

第十三章 即事而真と阿字本不生

即事而真とは事に即して真なりと申すことであります、事とは實在、現象の凡てにあり、真は、眞實、偽りなしで虚偽ではない、假設でもない、事に

即して眞現象に即いて實在、轉變に即して無爲、生滅に即して不生滅であります。此の理から凡夫も聖者も同一實相の一眞理の上に居り、人世の種々なる事相、喜怒、哀樂の人情も直に佛の境界であります。此れは前章の三大圓融論からして來るべき當然の眞理であります。凡そ吾人の覺知し得る所のものは凡て、生滅、轉變するものであります。然らば其の現象の實體は抑も何處に左るかど尋ぬるに、其の轉變、生滅、夫れ自身が即ち實體であります。轉變、生滅は必竟一局部の現象に過ぎないので

ありまして、宇宙の大局から見ると、少しも増減、消長はなく、永久に不動、不變、不生滅であります。此の有様を稱して阿字本不生と申すのであります。阿字とは實在若くは絶對と云ふ文字の代用であります。即ち宇宙萬有の眞際に名づけたものであります。即ち之れを人格に約すると、毘盧遮那法身如來、即ち大日如來と申します。尙語を換へて云はゞ言詮不及、意路不到の絶大であります。元來『阿』は自然的の音聲でありまして、宇宙の眞際は『阿』であります。而して本不生とは宇宙全體から觀察し

生而不生  
不生而生

た解釋でありまして、前述の如く小局部に多少の生滅、變動があるとしても、大局に於ては更に本不生である即ち不轉變である、不生滅である、夫れで生而不生、不生而生と云ふ二句を以て、部分と全體、轉變と不變、形相と實體との關係を說示してあるのであります、此れは恰も物と心、又は體と象との關係を二而不二、不二而二と云ふと同じ意味であります。

而二不二

●而二不二 (而二は轉倒で二而であります) 而二とは一のものを姑く二と見ることでありまして、不二とは二と見るも其實一なりと云ふことで、譬へば兩部の大經に就て申せば、兩部と云へば而二でありますが、

其實不二であります、兩部を別に見るは姑く不二の上に二而を見たのであります、二而と云へば其中に不二があり、不二の中には二而があるので、生佛不二、因果不二、迷悟不二も同意であります。

#### 第十四章 六大法身論

六大無礙常瑜伽の理法に依り、物質的たる地、水、火、風、空の五大には就れも識大なる精神が涉入しますから、萬有一として精神の無いものはないのであります、草木は勿論金石、沙磧に至るまで、夫々意思精神を有して居るのであります、又三大圓融の理に依り、物には皆悉く體、相、用が具足して居り

萬有は一の大連鎖

宇宙は一大人格

一塵一毛の大日法身

ますから、物として活動しないものは無いのであります。萬有は同類異類の無礙互具、各具不離加持、圓融の理法に依つて相關聯し、萬有は一の大連鎖であります。又即事而真でありますから萬有の外に實在界は有りません。萬有が即ち實在であり法界であるのであります。故に宇宙は一大活物であり、一大人格でありまして、人格的活動を爲しつゝあるのであります。六大法身と云ひ、六大即大日如來と云ひ、一塵一毛悉く之れ大日法身と申しますのは、大日如來でも一塵一毛でも均しく之れ六大

の所生に外ならぬから、宇宙萬有の凡てが、箇別的にも総合的にも、悉く活物であり、人格を有して居ると言ふ譯であります。言ひ換ふれば宇宙は人格的大日如來であると同時に、其の箇々の萬有も夫々亦人格的であつて、小大日如來であると云ふ意味から六大法身と云ふので、密教の宇宙觀は斯く合理的のものであります。

#### 第十五章 本有常住論

本有常住とは、前に述べたる如く萬有の實際は不増、不減、不生、不滅であります。只凡眼に映する



所の榮枯盛衰、有爲轉變、乃至生死の如きも必竟形相の變化、位置の轉換に外ならぬので、宇宙の大局は本有常住であります、小乗教では此等有爲轉變の小波瀾を見て直に悲觀し、人世を無常と觀する結果、何とかして此の無常の世間を厭離して、出世的の有常を求めんとするのでありますが、密教では此の本有常住主義に依つて終始しますから、萬有は無始無終である、即ち本有常住であるから、過去、現在、未來の三世をも超越して絶對の現世主義であります、でありますから譬へば現在貧困に

苦しむは現世の過去に怠慢した應報であります、現在に勤勉努力すれば現世の未來に幸福を得るのであります、故に我々は現在に於て力限り根限り活動奮闘しなければならぬのであります、宇宙法界の實在は本來活動的でありますから、吾人の心身も本來活動的なる筈であります、故に奮闘活動は此の本質に適應する所以でありますから、活動は人の至善でありまして、怠慢、無性は此の本質に叛くが故に罪惡であります。

密教に在りましては、前に屢述べました如く、現象を離れて實在を説きませぬから、實在は當然活動的である譯であります、従つて其の人生觀も過現未の三世を別つことなく現世常住主義でありまして、世間の外に出世間を覓めず、佛身を吾人の凡身に求めるのであります、故に佛に成らんと思ふならば、大に活動して執着と怠慢とを去り、向上進取すれば即身成佛が得られるのであります。萬有一として法界の本質に逆つて活動しないものとしては無いのであります、千百年間靜止不動の

如く見ゆる大磐石も其實分子は絶へず旋動して居るのであります、活動は實に宇宙萬有の生命であり根源であります、物心を通じての原理は活動であります、故に吾人は大に働かなければなりません、時間的には可及的長く、空間的には可成的廣く働くと云ふことが、吾々の本分であると同時に之れが善であります、併し徒らに結果のみを豫望して活動すると云ふことは、活動せぬには無論優るが活動の爲めに活動する程に最善ではありませんが、吾々は只實在の本質に適應すべく働くので

あります、衛生に注意して長壽を保ち、活動力を成るべく長からしめ、又一身よりは一家の爲め、一家よりは一國の爲め、一國よりは人類全體の爲めに働くこと云ふことは、夫々善の程度を増す所以であります、反之して怠慢な論勿く活動を抑止する如き行爲も云ふまでもなく佛界の本意に叛く所の罪惡であります、現今の紳士と呼ばれる、輩の行爲は概して此の罪惡のみであります、假りに卑近の一例を擧げて見まするならば、差したる必要のなき場合にも拘らず、見えと號する虚榮心に驅られ

て、歩むべく付與せられたる脚の活動力を抑止し、多数同胞の迷惑など一向眼中になく、群集雜鬧の中に自動車を驅り飛ばしたり、而已ならず心身の活動力を茶屋酒で抑止するに至つては罪惡の極みであります、然れば之れが應報として、時に汽車電車と衝突し若くは懸崖から墜落して無間地獄の苦みを受け、又は宿醉の爲めに嘔吐を催し、可憐ら大牢八珍も咽喉を通らず、之れぞ餓鬼道に非ずして何ぞやであります、否、紳士許りではありません、官衙や會社のサラリーメン中にも往々此等活

動抑止の輩を見受けるのであります、歐洲文化は時につまらぬ副産物までも輸入して呉れるには閉口致します、サボタージュとか、ストライキ杯いふ活動抑止を他の多數者にまで及ぼすことは、甚大なる罪惡であります、此の輩のもやはり怠業には違ひありません、日の最も長い春暖の候にすら、春眠不覺曉然たる顔貌をなし、九時の始業時間にさへ常に遅刻勝ちで、先づ座席に着くや悠々然として一服し、些細な事務を二日も三日も大切そうに引延ばし、貴重の時間を雑談と喫烟に空費し、尙

も終業時の至るの遅きをかこちつゝ、自ら苦みつゝ、勉めて活動を抑止するとは、何たる愚劣な輩でありませう、斯る輩こそ、善政の賚たる世にも珍らしき失業統計と號するものゝ筆頭に擧げらるゝ資格は十分でありまして、其結果家庭は忽ち修羅道、餓鬼道と化するのが落であります。反之して鐵工所の職工が終日流汗淋漓として大ハンマーを打ち振ることや、木挽が日夜大鋸と根較べすることや、軌道の轉轍手が饑くが如き日中、切るが如き寒夜に身を曝らし乍ら己が任務を竭すことや、

乃至學者が日夜研究室に閉ぢ籠つて苦心慘憺することなどは、何れも神聖で且つ高尚で善の善なるものでありまして、而かも宇宙の目的に協つて居るのであります。如何にしても百味の飲食は額に汗して食ふものゝ味覺にのみ存するのであります。まして、貴族とか樂隱居の膳槿には、到底木挽や鐵工の面通飯の美味はないのであります。己れの職務に忠實に己の職業を樂んで活動するのが菩薩の境界であります。働いて疲れて安らかに眠り得るのは涅槃であります。吾人は只宇宙の大原理に

順應して活動すべしであります。活動し活動して了つたならば安穩に絶對の懷に眠るのであります。斯く吾人は永き眠に就くも、吾人の活動力は子々孫々の上に、若くは社會の上に無窮に連續して、**酬●因●感●果●の●法●則●**に支配せられて行くのであります。

之れを以て眞言祕密の法の本篇を終わります。

眞言密呪

## 附録 真言密呪

### 一、本宗信者の信仰

凡そ密教を信せんとする人は、先づ教主大日如来と、高祖弘法大師を信仰するのであります。大師は入定し給ひましたが、其實今も猶此の世にましまして有縁の人々をお救ひなされつゝあるのであります。大師の御遺告に左の如く仰せられてあります。

『吾れ眼を閉ぢて後は必ず方に兜率他天に往生』

し、彌勒慈尊の御前に侍すべし。五十六億餘の  
後には、必ず慈尊と御共に下生し、祇候して、吾が  
先跡を問ふべく、且つ未だ下らざるの間は、微雲  
官より見て、信するや否やを察すべし。是の時  
に勤めあるものは、祐けを得、不信のものは不幸  
ならん、努力努力、後に疎かに爲すこと勿れ。」  
とありまして、此の通りに大師は今でも見通して  
ありますから、假令へば、盲目聾啞から天刑病者に  
至るまで、其他如何なる難病者や不具者でさへも、  
一心の信仰に依つて現益を受けつゝあることは

我々の日常見聞し且つ目撃する所であります。  
大日經に曰く、  
『我が功德力を以ての故に、如來の加被力を以て  
の故に、法界力を以ての故に、此の三縁合するを  
以ての故に、即ち能く不思議の業を成就す。』と  
之れであります。吾々の信仰が専一であります  
れば、如來と大師の三密が吾々の三業と加持して  
如何なる不可思議の事をも成就するのであります。  
加持とは本篇にも述べました通りに、如來の  
救済力が吾々凡夫の上に加はるのが加であります。



して、持とは吾々が信仰に依つて此の救済力を受  
 持すること、如來の加被力がありましても、吾々  
 に之れを受持するだけの信仰がなければ、成就は  
 致しません。又同類相互の加持と申しまして、口  
 に眞言を唱へ、手に印契を結び、心三摩地に住し、專  
 心如來を念じますると、自己の三業と他人の三業  
 が相互に加持渉入して、これに如來の加被力が加  
 はると、入我々入の法則に依つて、自己と他人は渾  
 然として一如に歸するのであります。さて口に  
 眞言を唱ふる所以は、妄語せぬ虚偽は言はない、眞

實を語ると云ふこと、手に印契を結ぶのは、動作を  
 正しくして邪ならしめぬ爲め、心に如來を念ず  
 るのは、諸の邪念を断つためであります。其の  
 結果として偉大なる作用を現はし得ると云ふこ  
 とは、本篇所説の六大無礙、四曼不離、三業具足の原  
 理から、當然來るべき結論でありまして、而も亦經  
 験的事實であります。之れが此の密呪の所依の  
 原理であります。

二、眞言密呪(陀羅尼)

本宗には他の宗旨には決して之れ無き所の密

云々。』

呪の法と申すことがあるのであります。密呪の  
靈妙不可思議力に就ては、本篇辯顯密二教論の第  
五教益深廣の條にも畧述べました如くで大師も、  
『今此の陀羅尼を持する人は能く神通力を發し  
云々。』  
と其著秘藏記にも記された通りであります。抑  
も呪法の起原は頗る古いことでありまして、佛敎  
の未だ起らなかつた時から印度に外道の呪法と  
云ふのがありました。印度哲學の權威松本博士  
は之れを二期に別ち大略左の如く述べて居られ

ます。

(甲)吠陀時代から婆羅門書を経ウパニシャドに  
至る迄の呪法は、鬼神を祀り、邪妄を驅り、人の爲め  
に災を穰ひ患ひを釋くのであります。之れに  
も消極と積極、即ち善意と惡意との二種類がある  
のであります。善意のは直接其人に幸福を與へ  
られんことを願ふもので、例之へば戰勝を祈り、五  
穀の豊穰、疾病の平癒を祈る如きもの、惡意のは直  
接に他人に災害を下し、之れに依つて間接に己の  
幸福を得んとするもので、例之へば怨敵の退散、降

伏死滅を願ひ、惡鬼の災害を己の一身一家に降さ  
やらんことを祈る類であります。

(乙)ウバニシヤド時代に至つては、一切が哲學的  
に解釋さるゝやうになり、總持陀羅尼の漢譯は心  
不動の状態を意義し、禪定三昧に入る手段となり、  
眞言密語は秘中の秘、最高神の符號であることか  
ら、宇宙本體を顯はす所以となり、従つてこれが一  
切顯象の根本ともなりました。それでこの密語  
を念誦すれば、之れによつて人は禪定三昧に入る  
ことが出来る。即ち吾人が一心不亂に之れを念

ずると、妄念は一切消滅し、心は清淨無垢となり、物  
もなく我もなく、唯宇宙の本體密語があるのみで、  
此の時小我は大我に冥合し、解脱正智の境に入る  
のであると。

密呪の神通力はよし吾々凡夫に解釋すること  
は出来ずとも、只々信仰信念に依り、此の摩訶不可  
思議力に信賴して、無上の利益を受くればよろし  
いのであります。但し爰に一言して置きますの  
は、本書に記述しまする一切は教祖大日如來から  
連綿として傳受し來つた正統の密教であります

本宗の左  
道即ち左  
斜派

正勝覺權僧

仁寛

が本宗にも左道と申しまして左斜派を生じたこととであります。今から約八百年前藤原時代の末葉に山城醍醐の三寶院權僧正勝覺と云ふ人が之れを唱へ始め其後保元の頃崇徳院の御歸依僧の仁寛が此の法に依つて院の御爲めに御祈禱をしましたが保元の亂後院の御失敗の爲めに反て嫌疑を受け伊豆に流されました。後宥されてから還俗して陰陽道と眞言と正邪混淆して種々の祈禱を爲し男女の道を金胎兩部の曼荼羅なりとし、邪義非法を説き出したのであります。之れが武

立川流

文觀

陀枳尼天  
の密咒

藏の立川で旗擧げしたので立川流と云ふのであります。降つて後醍醐帝の御時天台の文觀と云ふ僧が眞言に入り陀枳尼天の密咒を修して其の三昧に入り更に其の弟子が出世して天皇をお助け申した功に依り醍醐の座主にまで進みました。が天皇のお流されに成つた後關東に漂泊して再び左道を盛んに唱道し許多の門弟を作り全國に此の邪教を宣傳したのであります。然るに時の高野山の座主宥快法印は力を極めて此の左道を排斥し朝廷及び幕府に訴へて之れが撲滅に全力

宥快法印

をお注ぎに成つて爲めに立川流の名は表面無くなつたのでありますが裏面には其の面影が幾分残つて居るのであります。又此の眞言密呪は修驗道で行ふ禁厭の類とも同一でないことも御承知を願つて置きます。修驗道と云ふのは昔役の小角(役)の行者とも稱し大寶元年寂すと云ふ行者がありまして、十界修行、大悲代受苦など稱へ、中々組織的な體系を有して居りましたが、修驗道とは之れに密教の教理を混入したものでありまして、所謂山伏の類であります。必ず正邪彼此を混合

せぬやうに願ひます。

抑、眞言密呪は大師以前にも多くの僧に依つて我國に傳へられ、上下貴賤の間に非常に信仰されて居つたのであります。信仰するゝも道理であります。此の密呪を持誦すれば立どころに靈妙不思議の業を示現するからであります。甲斐風土記に記してある所に依りますと、敏達天皇の御宇十二年に新羅の國から日本に渡つて來た日羅と云ふ名僧は、常に身體から光明を放つて居りまして、勝軍地藏の呪と稱する密呪を修するこ

とに奇特を有し、此の密呪を持誦するものは、如何なる大敵強敵に對しても常に大捷を得たことが記してあります。現に豊後國に此の日羅の遺跡があります。又日本書紀の敏達天皇六年の條には、

『冬十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻經論若干卷、並律師比丘、呪禁師、造佛工、造寺工六人。』

と記してありますが、此の呪禁師と云ふのが即ち密呪に長じた僧のことであり、此等が我國

に密呪の傳はつた嚆矢であり、其後孝徳天皇の御代に來朝した法道仙人と云ふ僧は、金剛摩尼と稱する密呪を修し、天皇の御病氣を祈禱して直に靈驗を顯しました。又前に述べました修驗道の祖、役の行者は孔雀の密呪に長じ、越前の國の泰澄と云ふ名僧は種々の密呪を持誦したことは佛敎史に記載がありますが、中にも泰澄が密呪の靈妙を證明するに足ることは、時の帝文武天皇から『鎮護國家法師』の法號を賜つたことに依つて明かであり、又降つて白鳳年間支那から來

朝した道藏と云ふ呪禁師は、請雨の密呪持誦に不可思議の感應を有し、如何なる大旱にても此の僧が一度「請雨呪」を持誦すると、一時も經らない中に、大雨が沛然として降つたことが記してあります。又名門の出で名僧であつた彼の道鏡は不軌無道では三尺の兒童も其の惡名は知つて居りませんが、彼がそれ以前は名僧であつたと云ふことは知らない人が多數であらうと思ひますが、併し彼れも亦如意輪三昧と云ふ調伏の呪に長じて居たとの記載があります。併し彼れは此れを善用す

ることを知らず、遂に非望を企て、身を亡ぼし、無道の汚名を千載に流したことは實に惡むべく又憫れむべきではありませんか。

偕て密呪の中にも、佛頂尊勝寶篋印、大隨求等の陀羅尼や中に就て光明眞言の如きは、上下一般に非常の尊信を受けつゝ、今日に及んで居るのでありますから、爰に密教呪法の一例として光明眞言に就ていさゝか述べて見ませう。

三、光明眞言

金剛頂經光明眞言品に、光明眞言誦持の功德を

述べて斯う記してあります。

『此の眞言を誦持する者は、一切の天神地祇靈鬼等悉く歡喜悅可する所の故に、大福惠を蒙る。若し大智慧を得んと欲せば、東方に向つて十萬遍せば、必ず大智慧を得。若し長壽を得んと欲せば、東方に向つて五十萬遍乃至百邁遍誦せば、必ず長壽福樂を得べし。若し死者の爲めに、此の眞言一遍を誦すれば、必ず無量壽如來、死者の爲めに手を授けて、極樂淨土に引導し給ふ。』と斯の如く此の光明眞言は、世間出世間一切の希望

を満足せしめることが出來たのであります。否、今も尙ほ現に満足せしめつゝあるのであります。但し十萬遍乃至百萬遍と云ふのは、長時間に亙つてのことでありまして、一時に唱へよなどゝ、不可能のことを強ふる譯ではありませぬ。

光明眞言は左の如くであります。之れは梵語であります。が、記憶に便する爲め漢字を當てゝおきます。

唵阿謨伽毘盧遮那摩訶母捺羅摩拏鉢納摩人嚩囉嚩囉藐哩多耶吽。



弘仁二年弘法大師は、河内國高貴寺で、此の眞言を卒塔婆にお書き成された事蹟があります。但、當時は未だ一般の注意を惹くに至らなかつたのであります。が、降つて鎌倉時代の初めの頃、明惠上人が盛んに之れを鼓吹し給ひ、徳川時代に逮んで一代の學匠と呼ばれたる、賴慶、淨嚴、蓮體等亦頻りに之れを持誦、唱道されましたので、此の陀羅尼ばかりは、他宗にまでも普及するに至りました。高僧が英雄を願使し、貴紳を掌上に弄したのは、此の時代のことでもあります。

乍併此の光明眞言のみは、今は上述の次第で普遍的に成つて居ますから、少しでも眞言宗に信仰ある人は皆承知して居らるゝことでありませう。此の外に師資面授に依る密呪は多々あり、又密呪の不可思議の作用、靈驗の詳細は、大師の御著心經秘鍵をお讀みになればお判りになります。次に示す如き法は實に密呪として一茶飯の些事で、斯かる法を以て密呪の一例として掲げるのは寧ろ密呪の靈顯を瀆すの懼れがある位であります。特に宗外一般の人々に示すが爲めであります。

四、他人の好意好感を得る法  
以前には他人の絶對服従法と假名しましたが、  
本書には標題の如く命じました。何も服従法と  
申しましても、聊か不當ではないのであります。  
服従と云つても色々ありまして、昔ある國の軍人  
が從卒に對する權柄振りのやうに暴力や威壓で  
服従さすことも服従には違ひありませんが、斯か  
る服従は他人の意思に反する一時的の服従であ  
りますから、何時かはその反動で慘い目に逢はな  
ければなりません。然しこゝに述べます所の

服従法は反之して、他人が好意好感を以て己れに  
悦服するのであります。それで他人の好意好感  
を得る法と申した方が妥當でありませう。偕て  
茲に他人と申しますのは、親族に對する他人と  
言ふ意味でなくて、只自分以外の人又は動物乃至  
あらゆる物と云ふ廣い意義でありますから、親子  
主従、夫婦、兄弟、姉妹、師弟、朋友、乳母と幼兒、資本家と  
勞務者、商買と華客から、如何なる人々でも、否人間  
ばかりでなく、牛馬、犬猫は固より、草木、金石の非情  
と云はれて居るものに至るまでが、喜んで自己の

意志に従ふことになるのであります。でありますから本呪應用の範圍は至つて廣いのであります。が、今一二の例を擧げて見ますれば、先づ頑固な父母の心を柔げて、子女に理解あるやうにすること、父母からは怠惰な子供を勤勉ならしめること、放蕩で愛の薄い夫の放蕩を止め、妻に對して愛情あらしめること、夫からは又強情我慢な妻の心を柔順にし、貞操正しからしめること、團體若くは朋友間の交際を親密圓滿にすること、不良性で父母教師の教誨に従はない子女を善良に導くことか

ら、其他何人の好意好感をも得ることが出来ます。が、特に外交員、販賣人、一般の商人が花客の愛顧を得ることから、雇傭者が主人の好意好感を得ると云ふことは、商賣繁昌立身出世の捷路であります。併し此れは一時の戯れごとや邪道に用ひても決して感應はありませぬ。

糸

右に示すのが本法に用ふる呪符であります。梵字の卍字で識大を意味する文字であります。書き方は普通漢字の草體を書くのと同様でよろ

しいのでありますが、只少しく異なる所と申しま  
す。上の一點を寶珠點と申しまして最も重きを  
措くのでありまして、これを最後に書くのであり  
ますが、其書き方も單に一點を打つのでなくて、  
ろは』のいの字を書く心持ちで左より右と二筆に  
擁き合すやうに書くのであります。

次に示すのが、金剛界の大日如來の眞言であり  
ます。眞言とは本篇にも一寸述べました如く、  
(mantra)ノ譯語でありまして、(man)ハ思想の義、(tra)  
は擁護の義でありますから、曼荼羅は思想を擁護

するもの即ち言語と言ふ意で、此所の眞言は如來  
の内證功德等を簡單に讚歎し且つ眞實を語ると  
言ふ意味の詞であります。

唵縛曰羅駄都鐵

本宗では印契を結ぶと云ふことに重きを措く  
のであります。大日經密印品に據りますと、根本  
旗印、密印品又印、大蔬印、青龍軌印、地藏法要鈔印、陀  
羅尼集經法身印、不空軌印等がありました。夫々印  
の形式が異なるのでありますが、本呪に用ふるのは  
三鈷之印と稱する形式でありまして、其の契び方

は右手の拇指と中指の先端を固く着けて圓形とし、他の無名薬子の三指は伸ばすのであります。右の如く一に呪符、二に大日の眞言、三に印契と此の三則が具足して此の密呪が成立するのであります。呪符は密呪の標的でありまして、今如何なることを誦持するかと云ふこと、口に眞言を唱ふるは前述べたる如く如來を念ずると同時に眞實にして偽りは語らぬと云ふこと、手に印を契ぶのは心と共に形相を正しくすることでありまして、から前に言ふ如く非義邪道に用ひんとしても根

本からして功力の無いことは明かであります。聲字義に「眞言は福を受け、妄語は日夜苦を受く」とあります。今此の法を實地に持誦する方法を述べませう。先づ施法せんとする人に對して、其人の心附きて異様の感を興さしめぬ爲め、先方の心づかぬやうに袖の中等にて右手に印契を結びつゝ、前掲大日の眞言を數回默誦し、右巻の呪符を其人の前額に一回念書するのであります。信仰専らなれば一回にて靈驗があるのであります。萬一施法上に

不專念、不謹慎、又は雜念等の生ずる場合には靈驗はありませぬから、斯かる時には二回乃至三回改めて施法して差支ないのであります。其上にて其人に對して自己の欲する旨を陳べるのであります。

又對手が遠方に在つて直接面接の出来ない場合には遠隔施法を行ふのであります。其法は其人の居る方角に向ひ、其人の姓名を呼び、右手に印契を結び、右眞言を誦唱し、印を結び居る右手の食指を以て空間に表字を大書するのであります。

又寫眞施法は、其人の寫眞を几上に置き眞言を唱へ、印を結び、右手食指を以て表字を像に書し、寶珠點を面部に打つのであります。

此の法も前の遠隔法と共に斯法の延長であります。此の法も無論効果のある譯であります。牛馬其他の物に對するにも之と同様であります。

本篇數章に涉つて記述致しました密教の眞理、六大無礙論、四曼不離、三業具足及び三大圓融の諸論を熟讀玩味して、密教及び密呪に對する信仰、信念を高めて下さらば著者の本懷であります。

因に文部省編纂の尋常小學國語讀本卷八に左の如き韻文が記されてあります。

『椽側にうづくまる、三毛の猫、

愛らしき三毛と思へば、三毛もまた、

慕はしき人と、見るらん尾をたて、

咽を鳴らして、我にすりよる。』

此れは中々面白い詩でありまして、猫の識大と人の識大と同類無礙した状態を寫したもので、此の詩の作者は、多分眞言の教理を心得て居る人であらうと思ひます。又功熟な老農や、熱心な園藝

家になると、稻麥蔬菜や花卉が、水を下さいとか、肥料が濃いので困りますとか云ふ言葉が明かに通じると申します。又骨董愛玩家は、能く骨董品の意業を知り、素人には理解の出来ない程の手入れを致します。此れ等は皆、入我我入の境界であります。

要するに此の密呪を持誦するには、如來及び高祖に對する信仰と、密呪に對する信念が肝要であります。信仰信念が専らでなければ、如何に印契を結んでも、眞言を唱へても、之に佛の加被力は涉

入致しませぬから、何の感應のあるべき道理はありません。肝腎の信念、信仰に缺陷があつては死法であります。死法に活動力のないのは當然であります。燃ゆる如き信仰、信念があつてこそ、茲に初めて如來の加被力が加持して、不可思議の感應が顯れるのであります。「我が功德力を以ての故に、如來の加被力を以ての故に、法界平等力を以ての故に、此の三縁合するを以ての故に、即ち能く不思議の業を成就す。」とあるのが即ち之であります。斯く人々が互に好意好感を以てつき合ふ

ことは、誠に結構なことでありまして、之をおし廣めると、世界の平和、人類の幸福でありまして、闘争、戦争など云ふいはしきことは、言葉も文字もすがたを隠して仕舞うでせう、之が眞言主義者の理想であります。



附記

眞言密呪には前記光明眞言佛頂尊勝寶篋印請  
雨の外に尙ほ千手千眼觀世音菩薩滿願陀羅尼無  
量如來根本陀羅尼消災吉祥陀羅尼金剛壽命陀羅  
尼諸龍眞言藥師如來眞言如意輪觀音眞言能淨一  
切眼疾病陀羅尼大寶廣博樓閣善住祕密根本陀羅  
尼不動明王慈救呪毘沙門天王大心眞言法華肝心  
眞言發菩提心眞言三摩耶戒眞言等多々あります  
が望みのお方には表装用として揮毫(梵字)し別紙  
に誦法の假字を附けて上げます。右望みの方は  
深艸園宛に御照會あれ。

大正十五年十一月廿五日印刷  
大正十五年十一月三十日發行

定價金參圓

版權在  
著者不  
許複製

著作兼  
發行者  
京都市上立賣淨福寺西入  
大野 鯨 吾

印刷者  
京都市北小路通新町西入  
須磨 勘 兵 衛

印刷所  
京都市西洞院通七條南入  
内外出版株式會社印刷部

發賣所

京都市上立賣淨福寺西入

深 艸 園

## ●太極發現未來豫知法傳習

我々の身體に病氣が起つたり、物事の未來を豫知する事が出來ぬと云ふのは、我々の太極——即ち眞の心——眞言で申せば——識大が五官々能の私情に曇らされて居る爲め、原始的の靈力を發現することが出來ぬのである。鼠ですら家の倒れることを豫知し、狐、鼬でさへ火災を豫知する。然るに世の科學者は之れを本能と云つて輕視して居るが、此の所謂本能こそ原始的靈感である。萬物の靈長たる人に此の靈感を失つて居るのは五官々能の猿智惠の爲に太極を曇らせて居るからである。今斯術に依り（催眠術にあらず）太極發現を行へば、忽ち靈感の神人となり、未來を豫言し自他の病氣を治することが出来る——詳細規定は二錢券送れ。

京都市上立賣淨福寺西入蛭子町

### 太極道心身療法普及會本部

振替穴阪六二二五四番

新合説 **ナトリウム療法**

(一名萬病塩療法)

カルシウムの時代は去つて、ナトリウムの時代となりました。ナトリウム(食塩)は人體活力の要素であることは誰しも之を知る。然かも之れを應用して諸病、中にも普通醫藥的には難治、不治の病症が全治することを知る人がない。凡そ人身病氣の原因は人體に食塩が缺乏するに基くと云ふのが本會の確信であり、主張であります。本書は内外諸科各種の病氣に對し、食塩の内服及外用の分量方法を説きたるものであります。死に瀕してからの食塩注射は手遅れであります。早く本書に依つて奇績を知り給へ。(定價送料共金壹圓、但し二錢切手を五枚送れ宣傳の爲一冊贈呈)

京都市上京區上立賣淨福寺西入蛭子町

**太極道心身療法普及會本部**

振替大阪六二二五四番

終